

荒瀬豊の思想史研究

ジャーナリズム批判の原理

Study of History of Ideas of ARASE Yutaka :
Principle of Criticism of Journalism

根津朝彦

NEZU Tomohiko

はじめに

①思想形成

②ジャーナリズム論

③ジャーナリズム批判

おわりに

【論文要旨】

荒瀬豊（1930年生まれ）の思想をジャーナリズム概念とジャーナリズム史の観点から考察する。そこにはジャーナリズム・ジャーナリズム史を研究する意味はどこにあるのかという問いが含まれる。本研究は、初めてジャーナリズム史研究者である荒瀬豊の思想に焦点をあてたものである。具体的には荒瀬の思想形成、ジャーナリズム論、ジャーナリズム批判を通して検討する。

「①思想形成」では、荒瀬が東京大学新聞研究所において研究者生活を過ごす前史にあたる学生時代と新潟支局の朝日新聞記者時代に彼が「現実と学問をつなぐ」意識をいかに培ってきたのかをたどる。新潟の民謡を論じた「おけさ哲学」の分析とともに荒瀬の問題意識の所在を位置づけた。

「②ジャーナリズム論」では、主に戸坂潤と林香里のジャーナリズム論を参照しながら、荒瀬がジャーナリズムを単にマス・メディアの下位概念として理解するのではなく、両者にある緊張関係を考察したことを重視した。荒瀬がとらえたジャーナリズム概念とは、現実の状況に批判的に向き合う思想性を意味し、ジャーナリズムに固有の批評的役割を掘り下げたことを明らかにした。

「③ジャーナリズム批判」では、荒瀬の歴史上におけるジャーナリズム批判を具体的に検討した。米騒動において「解放のための運動」と新聞人の求める「言論の自由」が切り離される過程を荒瀬は読み込み、新聞の戦争責任と絡めて「一貫性ある言論の放棄」を見出した。荒瀬の敗戦直後の新聞言説の分析をとらえ返すことで彼のジャーナリズム批判の方法が論理の徹底性にあることを明示した。

最後に課題を挙げた上で、民衆思想を潜り抜け、知識人との距離感と諷刺・頓智への感度を有する荒瀬の実践的な批判性が、自己の知識人像とジャーナリズム思想を結びつける原理であったことを提起した。

【キーワード】ジャーナリズム史、ジャーナリズム、マス・メディアとの緊張関係、新聞の戦争責任、思想の批判性

はじめに

本稿は、現在の研究潮流から忘却されつつあるジャーナリズム史研究者の荒瀬豊（1930年生まれ）の仕事进行分析することで、彼が残したジャーナリズム思想の意味と特徴の一端をつかむことを目的とする。なぜ今荒瀬をとりあげるのか。その意義は3つあると考える。第1に、荒瀬の研究業績を既存の先行研究の中で位置づけ直すこと。第2に、ジャーナリズム固有の理念と役割を確認すること。第3に、ジャーナリズムを批判的に検証する方法を探究することである。第2と第3は、荒瀬のジャーナリズム論とジャーナリズム史研究を考察する作業を通して果されよう。

荒瀬の思想史研究を試みる本論は、既存の先行研究に組み込みながら今までなされてこなかった荒瀬の全体の研究業績に脈絡をつけること自体に意味がある。荒瀬は大学を卒業後、1年間朝日新聞社で勤務した後は、東京大学新聞研究所で研究生活を送り、数多くの論文と時事評論を発表した。しかし1950年代半ばから1960年代を中心とする「論壇」での精力的な執筆活動にもかかわらず、彼の仕事は1冊も単行本としてまとめられず、現在メディア史でも荒瀬の仕事が顧みられることは僅少である。

例えば本研究で荒瀬のジャーナリズム批判の原理を最も示すものとしてとりあげた論文「占領統治とジャーナリズム」に関しては、有山輝雄、井川充雄、山本武利らが言及しているように、無論先行研究としての位置づけが皆無なわけではない。⁽¹⁾朝日新聞「新聞と戦争」取材班『新聞と戦争』[朝日新聞出版、2008年]でも2カ所で荒瀬の論文（「日本軍国主義とマス・メディア」と「占領統治とジャーナリズム」）に触れられている。しかしいずれも荒瀬のジャーナリズム思想に詳しく踏みこんだわけではなく、⁽²⁾散発的な言及に留まっている。数少ない例外として荒瀬の複数の論文と多少内容分析に言及した杉山光信「新聞研究所と1950年代のマスコミ研究」[『東京大学社会情報研究所紀要』58号、1999年]が目につく程度である。もちろん荒瀬研究も存在しない。荒瀬のように多数の研究論文と時事的評論を残しながら全く単著がない研究者も珍しいであろう。ゆえに荒瀬の研究業績を総体的に把握することは困難であり、時代が下れば先行研究として一層認識されにくくなる側面があるのは事実である。

従って荒瀬の全体像の骨格を掌握しやすくするために10本の主要文献を以下のようにまとめた。①民衆思想史、②批判的ジャーナリズム史、③自己の学問の在り方、④戦後思想史、⑤ジャーナリズム論である。番号は初出論文の時系列順に並べ、①②③を位置づけるために④と⑤の総論的仕事が生まれたと理解できる。本論では、特にこの中から「現実と学問をつなぐもの」、「ジャーナリズム論のために」、「占領統治とジャーナリズム」の3本の論文を章ごとの分析対象の中軸とした。

次に、ジャーナリズム固有の理念と役割の考察である。ジャーナリズム自体が巨大な権力を有するようになり、以前にも増して報道被害を起こすマス・メディア産業に転じていく時代背景と、インターネットを始めとするメディア変容を抜きには語れないが、ジャーナリズムという言葉そのものが埋没しつつある現状が認められる。あくまでも大まかな傾向という留保はつくが、試みに朝日新聞社の記事データベースを検索しても、もともとジャーナリズムという記事件数のヒットは少ないものの、1980年代、1990年代、2000年代いずれもマスコミとメディアの用語が含まれる記事の

表 1

| ① 民衆思想史 | ② 批判的ジャーナリズム史 | ③ 自己の学問の在り方 |
|---|--|--|
| 「おけさ哲学」[『思想の科学』1954年11月号] | 「新聞独占の形成過程」[『思想』1955年2月号] 「国際問題と日本のマス・メディア」[『別冊法律時報』1号, 1957年2月] 「日本軍国主義とマス・メディア」[『思想』1957年9月号] 「占領統治とジャーナリズム」[『戦後改革 3 政治過程』東京大学出版会, 1974年] | 「現実と学問をつなぐもの」[『思想の科学』1955年4月号] |
| ④ 戦後思想史 | | ⑤ ジャーナリズム論 |
| 「戦後思想とその展開」[『近代日本思想史講座Ⅰ』筑摩書房, 1959年] 「戦後状況への思想的対応」[『近代日本社会思想史Ⅱ』有斐閣, 1971年] | | 「ジャーナリスト」[『ジャーナリズム 講座 現代マス・コミュニケーション 3』河出書房新社, 1960年] 「ジャーナリズム論のために」[『新聞学評論』34号, 1985年] |

方がジャーナリズムのものより多いことがわかる。80年代まではマスコミを含む記事が最も多くなるが、90年代以降はメディアがそれを上回るようになる。それは90年代と比べて2000年代の方がマスコミを含む記事数が微減することからも窺える。

林香里も「日本の大学では多数の「マスコミュニケーション論」「マスメディア論」あるいは「マスコミ論」講座が開設されているが、「ジャーナリズム論」と名のつく講座は数えるほどしかない」といい、現代日本における「ジャーナリズム」という言葉の影の薄さを指摘している⁽³⁾。例えばメディア史の優れた先行研究として知られる佐々木隆『メディアと権力 日本の近代14』や有山輝雄「メディア史を学ぶということ」らにもそのことは反映されているように思われる⁽⁴⁾。前者ではジャーナリズムの語はほぼ皆無に近く、後者もジャーナリズムの語句は登場していない。これはメディアという大きな枠組みが設定されるようになったことに由来し、言うまでもなくその意義を認めるにはやぶさかではないが、それによって時事論評や言論・報道を範疇とするジャーナリズム固有の焦点と有効性が拡散してしまう側面は検討が必要であると考ええる。

この現状はジャーナリズム研究の講座の減少からも指摘できよう。名称の違いはあれども戦後日本において多かれ少なかれジャーナリズム研究を焦点にした講座は、『講座 マス・コミュニケーション』全6巻[河出書房, 1954～1955年]を皮切りに、『講座 現代マス・コミュニケーション』全3巻[河出書房新社, 1960～1961年]、『講座 現代日本のマス・コミュニケーション』全4巻[青木書店, 1972～1973年]、『講座 コミュニケーション』全6巻[研究社出版, 1972～1973年]、『講座 現代ジャーナリズム』全6巻[時事通信社, 1973～1974年]、『講座 現代の社会とコミュニケーション』全5巻[東京大学出版会, 1973～1974年]と出版された。その途中に鶴見俊輔[編]『ジャーナリズムの思想 現代日本思想体系12』[筑摩書房, 1965年]が位置している。事実上、ジャーナリズム研究を中心としたのは時事通信社の『講座 現代ジャーナリズム』で途絶えている⁽⁵⁾。

その後もいくつかの企画は出版されている。しかし、それらは研究状況を体系的に総括する講座とは性格をやや異にしており、「論壇」の変容という状況も考えられなければなるまいが、ミネルヴァ書房によって『叢書 現代のメディアとジャーナリズム』全8巻[2003～2010年]が出版されるまで約30年に及ぶ断絶があったことは、ジャーナリズム研究への社会的関心の如何をある程度

物語るものであろう。

別府三奈子は、日本では「ジャーナリズムの規範創出の根底を支えているアカデミズムとジャーナリズムの人的相互交流もほとんどない」と⁽⁷⁾いっているが、岩波書店から出された『ジャーナリズムの条件』全4巻〔2005年〕はその状況を象徴している。少数の研究者を除き、圧倒的多数の執筆者は現場のジャーナリストで占められている。そのことを特色として提起しており、それ自体にプラス面があるのは当然だが、とりわけ『ジャーナリズムの条件』では、これまでの講座でなされてきた長期的な歴史軸のスパンによる考察が著しく乏しい。このことが、これまでのジャーナリズム史研究で蓄積してきた知見を継承しづらくしているのは確かであろう。

とはいえ、佐々木隆が整理した卓見であるが、そもそも新聞史・メディア史研究者の層自体もともと薄かったことを指摘しておく必要がある。⁽⁸⁾1992年のメディア史研究会の創立によって状況は変化してきたが、政治史・経済史・社会史が歴史研究の主力を占め、それらは当然新聞資料を用いることはあっても、どちらかといえばメディア史・ジャーナリズム史は歴史研究の従属的な位置にあったといっている。

例えば原寿雄が小和田次郎名で書いた同時代の記録である『デスク日記』全5巻〔みすず書房、1965～1969年〕、岩崎勝海『出版ジャーナリズム研究ノート』〔図書新聞社、1965年〕、小和田次郎・大沢真一郎『総括 安保報道』〔現代ジャーナリズム出版会、1970年〕、日高六郎〔編〕『マスコミ戦後資料』〔日本評論社、1970年〕といった優れた記録類は無数あるにせよ、研究者による戦後日本を対象とした代表的なメディア史・ジャーナリズム史研究は、有山輝雄、山本武利、佐藤卓己、井川充雄らの著作はあっても、⁽⁹⁾他分野の日本現代史研究と比べればまだまだ蓄積に厚みがあるとはいえず、ましてや講和条約以降ないし1960年代以後の時事論評や言論・報道を対象としたジャーナリズム史に焦点をあてた研究となると圧倒的に少ないのが現状である。⁽¹⁰⁾

試みに1990年代以降の日本現代史研究の主だった講座類を紐解けば『日本同時代史』全5巻〔青木書店、1990～1991年〕、『戦後日本 占領と戦後改革』全6巻〔岩波書店、1995年〕、『岩波講座・日本通史』20～21巻〔岩波書店、1995年〕、『岩波講座 近代日本の文化史』9～10巻〔岩波書店、2002～2003年〕、『日本史講座 戦後日本論』10巻〔東京大学出版会、2005年〕を見ても、文化史・思想史の項目でジャーナリズムやメディアが論じられることはあっても、直接的に戦後日本のジャーナリズム史を主題とする論文は皆無といっている。⁽¹¹⁾「戦後思想・文化」の項目が『史学雑誌』の「回顧と展望」に掲載されたのも1995年の安田常雄の執筆を嚆矢とした。⁽¹²⁾こうした現況を批判的に再考するために荒瀬のジャーナリズム論と以下のジャーナリズム史研究を分析するのである。

最後に、ジャーナリズムの批判的検証の方法を探究することに関してである。上述してきた視点と重なり合うが、荒瀬のジャーナリズム史研究を対象とすることで、ジャーナリズムを検証する際の批判的・歴史的視座を得ることができる。朝日新聞社の事例のようにかつての戦中・戦後の本格的な報道検証が行われるようになってきた。⁽¹³⁾それだけに改めてその歴史的検証の方法が求められている。

「日本にはあまりプレス批判史と呼べるような批判の流れがない。しかし、米国の場合は、ジャーナリズムに対するジャーナリズムが、19世紀後半から今日にいたるまで、主に雑誌を主媒体として盛んである」と述べたのは別府三奈子である。⁽¹⁴⁾実はそうした問題意識は清水幾太郎に早くから見

出されるもので、清水は「ジャーナリズム、殊に毎日の新聞をさまざまな角度から批判することは、批評家として立つものの回避を許さぬ義務に属する」と断言していた。⁽¹⁵⁾戦後日本においてこのジャーナリズム批判の役割を少なくとも安保闘争時までは総合雑誌が担っていたといえる。荒瀬豊の仕事もこの「プレス批判史」の潮流に位置づけることができよう。

もちろん山本武利がいうように「不偏不党」の偽善を歴史的に説いてみたところで、現場のジャーナリストやジャーナリズム企業に大きな影響を及ぼすとは考えづらい。⁽¹⁶⁾ただし、ジャーナリズム批判の方法を探ることは、ジャーナリズムの読者・受容者がその日々の報道やジャーナリズムの社会的役割を再考する際の参照軸にはなろう。

加えて、別府がいうように「転職が容易でなければ、読者よりも、従業員として上司や経営者の評価や意向に配慮せざるをえない。ジャーナリズム活動に専従する個人の大半を支えるものが会社しかない国では、企業ジャーナリストが増えるのは自然なこと」であり、「編集権そのものを経営者に預けている日本の企業ジャーナリズムと、編集権を個々の編集者に委ねるがゆえに、編集者に特化した専門職能団体や綱領の実体化のための教育制度の構築と運用に大きなエネルギーを投入する米国のジャーナリズムは、職能の中核理念においても、理念を実体化させる制度面からみても、全く異質なものとなる」⁽¹⁷⁾実情は押さえる必要がある。

そうしたことを踏まえた上で、今問われているのはジャーナリズム固有の原理の考察なのではないだろうか。荒瀬は原理について以下のように述べている。⁽¹⁸⁾

自由な言論がおこなわれているからといって、そこに言論の自由の原理が存在しているわけではない。原理の確立は、原理不在の状況のなかにあって原理の必要を人人がみとめはじめたときから開始される。存在しないものに気付いて存在への問いかけをはじめたときから、理念は現実化への行程にはいる。

荒瀬は「原理を柔軟に現実化する操作」が重要であると強調することも忘れてはいない。「だいたいじなことは現実に慣れることでなく、原理をまずみずからに練りこむことである」という荒瀬の言葉は、ジャーナリズムという言葉が風化しつつある現代において試されている。⁽¹⁹⁾本研究は、ジャーナリズムに求められる批判的原理と、ジャーナリズムそのものを批判する原理を荒瀬のジャーナリズム思想から探る試みである。

本論では具体的に以下3つの手順を踏み、荒瀬のジャーナリズム思想を考察する。すなわち、荒瀬の思想形成、ジャーナリズム論、ジャーナリズム批判の検討である。⁽²⁰⁾とりわけ中核となるジャーナリズム論を中心に据える。

①……………思想形成

まず荒瀬が若かりし頃にした思想の科学研究会入会の記である「現実と学問をつなぐもの—私のこしかた、ゆくすえ」⁽²¹⁾『思想の科学』1955年4月号を手がかりに、彼の思想形成をたどる。この題名自体に彼の思想が象徴されているといえる。「1 学生時代まで」と「2 新聞記者以降」に

時期区分を設け、2度に及ぶ聞き書きの内容を適時加えながら、荒瀬がジャーナリズム研究に関わるようになった過程を明らかにする。そしてその荒瀬の思想がいかに「3 民衆思想への関心」と相乗しながら形成されたのかを考察する。

1 学生時代まで

荒瀬豊は1930年2月15日⁽²³⁾に東京の田端で生まれる。父は農家の次男に生まれ、鹿児島で同郷の母とともにほぼ無一文で東京に出る。父は戦前から日本放送協会でラジオの台本の製本職人をしていた（荒瀬談1）。父の職業が荒瀬豊の大衆文化に対する関心の醸成にどれほどの影響があったかは定かではない。しかし両親の郷里が鹿児島であることは、第七高等学校に進学する契機にはなったであろう。

1930年生まれの荒瀬にとって幼少期は当然ながら戦時中の事象と重なっている。「兵隊がいっぱいできょうは勤めはダメだ」と父が帰宅した2.26事件の頃の幼い記憶があり、荒瀬の小学校時に日中戦争が始まり、小学6年生の冬に「真珠湾攻撃」のラジオ・ニュースを耳にした⁽²⁴⁾。中学4年のときに東京大空襲と敗戦を迎えたとあるので、東京府立第五中学校（1943年から東京都立第五中学校と改称）に入学したのはおそらく1942年であろう。中学時代、特に第2学年以降は授業を受けることは少なく「兵器廠に動員されて一週おきに徹夜作業を経験」し、「神州日本というスローガン」を心から信じる軍国少年であった⁽²⁵⁾。この中学校の図書室で読んだ『岩波講座 世界思潮』に荒瀬は「後々まで自分に響いてくる」ほど強い影響を受けたと語っている（荒瀬談1・2）。

荒瀬の戦後は、敗戦直後の闇市の原風景から始まった。「みんな貧しいなかで何かを求めているあのころの目の輝きは、今でも私にとって郷愁のような気持ちを起させる」のであり、『アカハタ』『民報』といった新聞を「食いつくようにして」読み、「自分たちが教えられなかった思想がある」と気づかされる⁽²⁶⁾。そんな中、父から「東京じゃ食糧がたいへんだから、いなかの高校をねえ」とアドバイスを受け、1946年春に鹿児島の第七高等学校を受験して、同年10月頃に合格発表があり七高に入学が決まる⁽²⁷⁾。入学前には手伝いで一通りの農作業を体験した。

七高の同級生は7～8割が陸士・海兵の出身者で荒瀬より5～6歳年長の者が多く、実年齢以上の「ませた思想や行動」を身につける機会となった。ただ「寮を中心とするストームや寮歌高吟」の雰囲気にはなじまず、ひたすら読書に集中する3年間の学生生活をすごす。中学の同級生が東京で勉学に専念していることも荒瀬の競争心をかきたて、1日1冊のルールが日課となる。

それとともに七高時代は「思想の核のひとつ」を形成した。荒瀬の下宿近くに英語の教授（土谷久雄、荒瀬談2）が住んでおり、かつて土谷がバーナード・ショーを研究していた関係で彼の家にはイギリス社会主義の本が揃えられていた。そうした文献に目を通す中で荒瀬は「たえず現実の問題から出発するイギリス型の思考方法」に感化されたのである⁽²⁸⁾。

「大学の三年間」という記述があり、朝日新聞社に入社するのが1952年であるため、七高を卒業して、東京大学法学部政治学科に入学したのは1949年である。大学時代、荒瀬の思想を育む契機として大きかったのは国際政治経済研究会、CIEライブラリー、新聞研究所である。入学後まず国際政治経済研究会に入った。それは何となしに外交官になりたいと考えていて、その名前からしても外交官に必要なテーマが示されており「これはいい」と思ったからだ⁽²⁹⁾（荒瀬談1）。研究会に入

ると外交官志望の者ばかりで受験塾のようなものであり、外交官は名望家の子でないと出来ないということがわかる（荒瀬談1）。

翌1950年には研究会の幹事役を任せられ、知識の必要性を感じ、「日比谷留学生」という流行語があったように、大学の講義そっちのけで日比谷のCIEライブラリーに通い詰める。授業をさぼり1週間のうちほとんどCIEライブラリーに「通学」し、新着の雑誌や図書のノートを書き溜めた。オーウェン・ラティモアやエドガー・スノーの本、『ニュー・ステーツマン』、『ネーション』、『ニュー・リパブリック』などにも触れ、「高校時代に学んだイギリス型の思考が現代をどう診断しているか」⁽³⁰⁾を学んだ。

さらにこの大学2年生で東京大学新聞研究所の第1期の研究生になったことが荒瀬の進路を決める。最初は政治を考える上で新聞を知ることにも意味があるだろうといった軽い気持ちで門を叩いたところ、就職先に新聞社を志望するまでになったからだ。そこでも講義に甘んじるだけでなく、研究者の「理論」に我慢できなくなり、学生最後の夏休みに高校の後輩木原啓吉と新聞の影響力の調査を行い、共著論文にまとめたのがおそらく初の学術論文と思われる「新聞は理解されているか—高校生を対象とした理解度調査」[『新聞研究』17号、1951年]である。日本新聞学会が設立されたのも1951年6月のことである。⁽³¹⁾

1951年の秋の就職試験では、『毎日新聞』と『読売新聞』の論調に同意できなかったため受験せず、朝日新聞社、共同通信社、NHKの試験を受けて、3社とも入社試験を通過する（荒瀬談1）。朝日新聞社では「対立」という作文課題が出された。荒瀬は一番心を引かれていた『ニュー・ステーツマン』のクロスマン主筆の国際政治観を踏まえて執筆した。イギリスの「労働党左派につながる思想の持主であることは試験官にわかっていたはず」だが、自己の思想を偽らずに入社することができた。⁽³²⁾朝日新聞社の受験に際しては新聞研究所長の千葉雄次郎に推薦状を書いてもらった（荒瀬談1）。『朝日新聞』を第1志望としたのは、イギリス・アメリカの週刊政治評論誌のようなものを刊行する可能性があるのは朝日新聞社だと思ったからである（荒瀬談1）。

いつ荒瀬が手に取ったか正確な時点は不明であるが、1951年に刊行された黒田秀俊『血ぬられた言論』（学風書院）で荒瀬は初めて横浜事件を認識した。1966年に書かれた回想で「無知のまますごした歴史への悔いと怒りが、「逆コース」のさまざまな指標への警戒と二重うつしになった日々に、血ぬられた言論ということばが一冊の書名というより以上の深さをもって迫ってきた」と述懐している。⁽³³⁾このような時期に荒瀬は新聞記者の道を踏み出すことになった。

2 新聞記者以降

1952年、朝日新聞社に入社してすぐに新潟支局に赴任して、警察回りからはじめ、教育関係と労働関係の取材担当となり、「裏日本のひとびと」の現実を目の当たりにする。それは荒瀬の民衆思想に根ざした上でジャーナリズムに向き合う姿勢を鍛えたといえる。

荒瀬は、かれらの「貧しさに驚くとともに、新潟にいる機会にその貧しさをとことんまで知りつくし、そこからひとびととともに成長するみちを発見したい」と記している。⁽³⁴⁾そしてわずかな休日には必ず農村に出向き、支局にいる記者のうちで一番もれなく新潟県内をまわる記録をつくった。同時に新潟の農民運動史の古い記録を探りノートに取っていく。この「すばらしく充実した毎日」

の記者生活が「高校、大学の学生時代に横文字を通じて現実につながる思想の必要を感じた私に、ようやく現実とは何かという問題に直面する機会を与えてくれた」⁽³⁵⁾。かくて現実を焦点化する状況という言葉が荒瀬の思想を読み解く一つの鍵になり、「現実につながる思想」が荒瀬のジャーナリズム史の研究へと結びつくのである。

ところが記者になりたての荒瀬に急転直下の転機が訪れる。新聞研究所に戻らないかという恩師の誘いがあった。「この突然の話は研究所の自由なふんいきへの郷愁」を一気に駆り立てた⁽³⁶⁾。さすがに記者になったばかりで「もうしばらく後にしてもらえないか」という趣旨を荒瀬は告げたが、この恩師である城戸又一は「大学の人事のチャンスはすぐになくなってしまうので覚悟してほしい」と説き（荒瀬談1）、1954年4月に荒瀬は東京大学新聞研究所の助手に採用される。その際、彼は「新潟のひとびととのつながりを絶ってはならない。象牙の塔にとじこもる研究者であってはならない」と誓った⁽³⁷⁾。

この時期に、荒瀬は新潟で妻となるパートナーと出会う。彼女に学問をすすめる啓蒙主義的な色合いが見られるとはいえ、「結婚生活を通じて共同研究や共同活動を展開しているひとびとの人生」が荒瀬にとっての夢であり、その実践に向き合うことで「日本の家族制度や社会意識の根本的な問題に解決のみちがひらけるのではないか」と考えていた。ここまでが『思想の科学』1955年4月号に発表された「現実と学問をつなぐもの」で窺える荒瀬の足跡である。これ以降の荒瀬の歩みは文献面からはほとんど明らかでない。

荒瀬が新聞研究所の助手になって城戸から手伝いを頼まれたのが『マス・コミュニケーション講座』全5巻〔河出書房、1954～1955年〕である。これは戦後初の体系的なマス・コミュニケーション研究をまとめた講座で、城戸が編集責任者であった第3巻「新聞・雑誌・出版」の実質編集は荒瀬が担当した。後述のごとく筆者は、荒瀬が戸坂潤の影響を受けているのではないかと思い、その点を確認したところ、ジャーナリズム論で特定の人物に影響は受けていないという。少なくとも七高時代には戸坂を読んでおらず、この『マス・コミュニケーション講座』の編集と論文執筆の折、この講座を主導した一人である清水幾太郎のジャーナリズム論にもう少し骨を太くしたいと思い、長谷川如是閑は正体がつかめないで、戸坂潤を読んだのではないかと荒瀬は語っている（以上、荒瀬談2）。

そして「現代政治評論家批判」〔『知性』1956年9月号〕辺りから「論壇」でも荒瀬の文章が目立つ⁽³⁹⁾。これ以降、多くの総合雑誌に荒瀬は時事的評論を発表していく。1961年6月に助教授になり、1972年4月には教授となった⁽⁴⁰⁾。時期を画定できないが、1977年の時点で「四年ほど以前に右目の手術を受けた」とあるため、1973年以前に網膜剥離になったことが窺える。手術は成功するも、網膜剥離になった翌年、今度は視野狭窄に見舞われ、「網膜剥離友の会」という患者団体が設立されるとその会報担当を務めることになる⁽⁴¹⁾。

また直後で述べる「おけさ哲学」を『思想の科学』に発表して以来、関わりの深かった思想の科学研究会の会員を荒瀬は、永井道雄が文部大臣のとき（1974年12月～1976年12月）に辞めている。「右寄りの文部大臣のいるところで政治学科出身の同じ研究会の人間がいたら何が起こるかわからない」と思ったからだ（荒瀬談1）。1987年に刊行された『東京大学百年史 部局史四』の新聞研究所の部分は荒瀬が命じられて執筆した（荒瀬談1）。1990年3月には新聞研究所を停年で退職し、

同じ1990年から社会福祉の研究者である一番ヶ瀬康子に誘われ日本女子大学人間社会学部に勤めた（荒瀬談2）。

3 民衆思想への関心

前述の通り、「現実と学問をつなぐもの」以外に荒瀬の自伝的叙述が皆無に近いのは、風評を遠ざけて文章そのものからだけで人物の中身を判断したいという思いと関係しているに違いない。荒瀬は、現存する人に関して「経歴を詮索するというのが、なぜか嫌い」で、「ある人の地位、身分とか、たどった経歴よりも、その人の書き、語ることばをこそ、その人を知る手がかりにしたい、という願いが私の動かしがたいものになっている」と述べている。それは空襲下の防空壕の大人たちの会話も、戦後の思想研究グループでの知識人たちの雑談も他人の噂話に満ちていたことへの「複合的な嫌悪感」⁽⁴³⁾に由来していた。

そして荒瀬の中で見逃せないのは、知識人への距離感である。以下の記述にその姿勢は示されている。⁽⁴⁴⁾

〔中学時代の〕勤労働員で学んだセンバンの技術、農村で肥オケをかついでおぼえた農耕の知識は、今でも私に妙に不敵な考えを植えつけています。大学出の研究者である私はやはりインテリの一員と呼ばれる存在なのでしょうが、何かの折に「どうとでもなれ、いざとなれば町工場でも農村でも働いてくらしだけは立てられるぞ」という気持が心の底に流れています。私がときとしてインテリのなまぬるい表現や態度に腹を立てて、働くひとびととともに歩こうとナマのことばをぶつけずにいられなくなるのも、その底には机をはなれることの多かった若い日々の生活からもたらされたものがあるのでしょう。

当時24歳⁽⁴⁵⁾の荒瀬は「インテリの一員」であるという自覚をもちながらも、その位置に同化・馴化されまいという意思を強くもっていた。このときも「できるだけ日本人に耳なれたやさしいことばで新しい思想をあらわしてみたい」と表明している。⁽⁴⁶⁾ そもそも先に触れた最初期の共著論文である「新聞は理解されているか」の書き出しは「現在のジャーナリズムが使っている文章は、はたして民衆に理解され得るものであろうか。コトバを通じて働きかけるジャーナリズムにとりもつとも重要なこの問題について、まだ十分な解明は与えられていないようである」という言辞であった。⁽⁴⁷⁾ ここに荒瀬の初心が刻まれていたといえる。

それから荒瀬の民衆思想への関心の原点というべき仕事に「おけさ哲学」[『思想の科学』1954年11月号]が挙げられよう。出だしの一文には「佐渡へ佐渡へと 草木もなびく／佐渡は居よいか 住みよいか」という「佐渡おけさ」が引かれ、⁽⁴⁸⁾ その観光曲ともなっている不安げな調べに「おけさ」でよまれた歴史性を忘却しつつある佐渡の観光客のにぎわいと対置する。この「おけさ哲学」は新潟県の民謡である「おけさ」に人びとの抵抗の含意をすくったものであり、新潟支局で農村を歩き回り、農民運動史の記録を読み漁った一つの成果である。

「数百も伝わっている」という「おけさ」の歌詞にまず読みとるのは女性にのしかかる「家の圧力」と「家のなかの不平等」である。その状態に「煙草のみのみ 唄う声聞けば／嫁も姑も もっとも

だ」と特権的立場にあぐらをかき状況を放置する男性の姿があらわとなる。⁽⁴⁹⁾農村社会の貧困・矛盾の問題は「家を出るときゃ 機織(はたおり)姿／羽黒峠(とね)越しゃ こも女郎衆」や「二十二、三の 女の声で／木材奉行衆の 宿はどこ」といった歌詞によまれており、後者の句は「酒と女がつきまとう官僚の生活にたいする民衆の抵抗がかくされたひびき」となり現代的意義をもつものと荒瀬⁽⁵⁰⁾は評価した。

そして「大小差す者は みな役人よ／おらも差します ナタガマを」という「二本の刀に表現された権力の威圧」に抵抗し「人間の平等」を希求する姿を見るも、百姓一揆の民謡「天保騒動だん のう節」では「苦労にさんすな 方々よ」や「重役新役 辛抱し／此末御放免 下され」といった農民の「後難を恐れる」気持ちに「圧政のきびしさ」を読み込んでいる。⁽⁵¹⁾口承による「おけさ」によまれた「政治的な抵抗」は、「すぐれた諷刺」をもちながらも「間接的な表現を余儀なくされ」、観光宣伝とマス・コミュニケーションによる「民謡の享楽面」の強調が、「時代を距てた現代人」への理解を困難にさせると位置づけている。⁽⁵²⁾

こうした荒瀬の「おけさ」への眼差しは、後のフォーク・ソングに抵抗と享楽を見出し、「細民」とともにあろうとした演歌師の添田啞蟬坊への関心に引き継がれる。⁽⁵³⁾民衆の抵抗と矛盾に視座を置いた荒瀬は、その政治的抵抗の役割をジャーナリズム論とジャーナリズム史研究に表現していくのである。

②……………ジャーナリズム論

ここでは新聞記者からジャーナリズム史の研究者となった荒瀬豊がジャーナリズムをどのように把握していたのかを分析する。最初にジャーナリズムとはいかなるものなのか代表的な「1 ジャーナリズム概念の先行研究」をまとめる。それを踏まえた上で「2 荒瀬のジャーナリズム論」の特徴を明らかにし、彼のジャーナリズム論の焦点となる「3 マス・メディアとジャーナリズムの緊張関係」について考察を行う。

1 ジャーナリズム概念の先行研究

ジャーナリズムの起源を詳述することは本論の目的ではないので、ここでは第一次世界大戦以降の時代を中心に、荒瀬と比較する上でジャーナリズム研究に携わった日本の先行研究がジャーナリズム概念をどのように理解してきたのかを整理する。

香内三郎によれば、ジャーナリズムという言葉は「フランス革命期の権力を批判し、民衆に新しい思想を植えた、と信じた、イギリスの評論家トマス・カーライルなどがその総評として使いはじめた用語である」としている。⁽⁵⁴⁾続けて香内は、ジャーナリズムにとって最低の要件は、歴史的な用法を踏まえれば、「少なくとも政治権力をたえず監視して批判し、一方では、民衆の意見を反映し、代弁してそれを表現」する活動に求めている。⁽⁵⁵⁾

しかし、林香里が整理するように、個人の「言論の自由」に立脚したジャーナリズムの活動も、19世紀後半から20世紀にかけての産業と技術の発展によるマス・メディアの誕生により「個人のものであったジャーナリズム活動の大部分は、マスメディア組織へと吸収」され、マス・メディア

は「権力に対峙する個人の活動というよりも、それ自体が権力となって」社会に影響を及ぼすようになった。⁽⁵⁶⁾つまり、マス・メディアの成立によって、ジャーナリズムとマス・メディアの機能が対立・矛盾をはらむようになってきたのである。

具体的に日本社会の場合を見ていくと、日本におけるマス・メディア／マス・コミュニケーション⁽⁵⁷⁾の成立は1920年代半ば頃といわれている。関東大震災以降、都市部に中間層が生まれ、1924年に『大阪朝日新聞』『大阪毎日新聞』が100万部を超え、1925年には『キング』創刊とラジオの仮放送⁽⁵⁸⁾が開始された。同時代にはウォルター・リップマンの『世論』が1922年に刊行されている。マス・コミュニケーションという言葉自体が使われ始めたのは、それよりも遅く1940年前後にファシズムの宣伝を研究していたアメリカの研究者たちによる造語であろうとされている。この言葉が初めて登場した公的文書は、1945年11月16日に制定された「ユネスコ憲章」である。⁽⁵⁹⁾

では一体ジャーナリズムという言葉はいつ日本に定着したのであろうか。その端緒となるのは1930～1931年に内外社から刊行された『総合ジャーナリズム講座』全12巻であった。⁽⁶⁰⁾それまでNewspaperは新聞紙と訳され、Journalismには適当な訳語が見出されず、この講座以前にはジャーナリズム／ジャーナリズムを表題にした書籍などなかったにもかかわらず、この講座以後は「あいつが、片仮名が無遠慮にまかり通ることになった」のである。⁽⁶¹⁾『総合ジャーナリズム講座』の出現は、マス・メディア／マス・コミュニケーションの成立という時代状況の変化と、日本のジャーナリズム論が分岐していく背景を象徴としているといえよう。それまでは新聞社の社員など現場ジャーナリストのジャーナリズム論が主流であったが、1920～1930年代以降になり、長谷川如是閑や戸坂潤に代表される学者や評論家のジャーナリズム論が中心となる。⁽⁶²⁾

こうした潮流の中で、日本におけるジャーナリズム概念の先鞭をつけた一人として先の戸坂潤がいることはよく知られている。⁽⁶³⁾戸坂は1932年に執筆した「新聞現象の分析」でジャーナリズムを「社会に於けるイデオロギーの一形態及び一契機」⁽⁶⁴⁾（傍点は原文）とし、1934年に書いた「ジャーナリズムと哲学との交渉」の中ではジャーナリズムを「表現報道現象」と位置づけた。⁽⁶⁵⁾なぜ報道現象に表現という言葉が戸坂が加えたかといえは「ジャーナリズムの本質的特色は決してただの報道としての報道にはつきないので、いつも批評を含んでいるか批評の意味を持っているかするだろうから」と述べている。⁽⁶⁶⁾その以前に戸坂は1931年に「アカデミーとジャーナリズム」の論文において以下のように記している。⁽⁶⁷⁾

アカデミーは容易に皮相化^マそうとするジャーナリズムを好意的に牽制して之を多少とも基本的な労作に向かわしめ、ジャーナリズムは又容易に停滞に陥ろうとするアカデミーを親和的に刺激して之を時代への関心に引き込む。アカデミーは基礎的・原理的なものを用意し、ジャーナリズムは当面的・实际的なるものを与える。

そしてこの戸坂の「アカデミーとジャーナリズム」の論文は、前年の1930年から刊行されていた『総合ジャーナリズム講座』の刊行に戸坂が何らかの刺激を受けたのではないかと和田洋一は推測し、和田はこの戸坂論文をして「ジャーナリズムの反対物としてのアカデミーを横において比較検討することによって、ジャーナリズムの姿を始めて明らかにしたといえる」と評価している。⁽⁶⁸⁾

戦後になってからは清水幾太郎がジャーナリズムの構成要素として大衆性・時事性・定期性を挙げ、「一般の大衆にむかって、定期刊行物を通じて、時事的諸問題の報道および解説を提供する活動をジャーナリズムと呼ぶことにする」と定義した⁽⁶⁹⁾。一方、鶴見俊輔は、「ジャーナリズムとは、単に新聞をさすものではなく、同時代を記録し、その意味について批評する仕事を全体としてさす」と述べ、「ジャーナル」にある日々の記録という意味に重きを置き、企業ジャーナリズムに限定されるべきものではなく、「市民のなしうる記録活動全体の中にジャーナリズムの根を新しく見出すことに日本のジャーナリズムの復活の希望がある」という視点を切り開いた⁽⁷⁰⁾。

以上に触れてきた香内三郎、戸坂潤、清水幾太郎、鶴見俊輔のジャーナリズム論をも丁寧⁽⁷¹⁾に押さえた上で近年ジャーナリズム概念の思考を掘り下げた研究に林香里の『マスメディアの周縁、ジャーナリズムの核心』[新曜社、2002年]がある。林の研究が提起したのは、マス・メディアとジャーナリズムの概念が混同されていることを指摘し、両者が一致する部分を「マスメディア・ジャーナリズム」というカテゴリーでとらえ、「マスメディアとジャーナリズムが互いに完全には一致しない部分の存在に注意を喚起し、それを可視化」しようと努めたことに意義がある⁽⁷²⁾。

林は、ドイツの社会学者ルーマンの理論を援用し、マス・メディアとは「情報／非情報」のコードによって「終わりなき自己組織性」を構築するシステムであり、「自由や平等を獲得するための市民による戦略的な言論活動をむしろ異質のものとして排除する方向に機能している」ものであると見なした。その上で、「民主主義に価値の基準を置くジャーナリズムの核心」はマス・メディアの周縁に発生するということに着目する⁽⁷³⁾⁽⁷⁴⁾。

マス・メディアの周縁とは「新聞読者の小さな声、決してゴールデン・タイムには放映されないドキュメンタリー、あるいはラジオ番組や、地方のケーブルテレビの自主制作放送や、細々と制作されるパブリック・アクセス・チャンネルなど」であり⁽⁷⁵⁾、日本の新聞「家庭面」、ドイツの「左派オルターナティヴ紙」である『ターゲスツァイトゥング』、アメリカの「パブリック・ジャーナリズム」運動の3つの事例の実態分析を含めて「ジャーナリズムという意識活動がその時代のどこに表出するのか」という研究視角を説得的に展開した⁽⁷⁶⁾⁽⁷⁷⁾。

2 荒瀬のジャーナリズム論

それでは荒瀬豊はジャーナリズムをどのような概念としてとらえていたのであろうか。一言でいえば、ジャーナリズムは思想・思想性を含むものであり、ジャーナリズムは状況に批判的に向き合うことで自由と主体性の獲得を目指す活動であり、現実を変えようとする言論活動である。そして荒瀬はその批判的言論活動の継続が重要であると考えたのである。まず荒瀬の一般的に論じたジャーナリズムの定義を掲げておく⁽⁷⁸⁾。

日々⁽⁷⁹⁾に生起する社会的な事件や問題についてその様相と本質を速くまた深く公衆に伝える作業。また、その作業をおこなう表現媒体をさしていう。歴史的には新聞や雑誌による報道・論評をつうじて果たされることが多かったので、転じて新聞・雑誌など定期刊行物を全体としてさす語として用いられることもある。ラテン語の、日々の刊行物をさす〈ディウルナ diurna〉に由来する。

その他には「ジャーナリズムの語義としては、ニュースを報じ意味づけるはたらき、そのような報道・解説・評論をのせる定期刊行物などのコミュニケーション・メディアをさす」と記している⁽⁷⁹⁾。古くは米国新聞編集者協会が1924年に明文化した「ストレートニュース（news）と、意見や解釈（views）の双方をもつ印刷出版物のことを、ジャーナリズムという」⁽⁸⁰⁾ 見解や、先に見た清水幾太郎の定義とそう大差はないであろう。強いていえば「その様相と本質を速くまた深く公衆に伝える作業」と荒瀬が述べる部分に強調点があると思われる。

一般的なジャーナリズムの定義から中身に入っていく際、荒瀬はジャーナリズムという語彙の「イズム」という思想・思想性に関連する接尾語にこの概念を定める手がかりを見出す⁽⁸¹⁾。つまり「ジャーナリズムの基本的特長は、それが特定の思想、思想性、思想傾向をふくむ点」にあり、「思想は本来的に主体によって意図されることなしには純粋化されないものであるから、ジャーナリズムは何よりも主体の思想的意図をその中核としている」と述べる⁽⁸²⁾。これはジャーナリズムに批評性を含むものと見なした戸坂と近い考え方である。また林香里が「今日の〈マスメディア・ジャーナリズム〉は、その思想性を喪失」しており、「これまでのジャーナリズムが思想性をもってはならないという思想、あるいは『『中立的』で『客観的』であるべきだ、という思想』をもっている⁽⁸³⁾」というのは、ジャーナリズムの特徴を逆の方向から射抜いている。

このジャーナリズムが思想・思想性をもつという荒瀬の考え方は、彼の専門の「言論史」という呼称にも見出される。無論、編集部による他称という可能性はあるが、特に書評紙において「言論史」が専攻であるという言及は数多くある。早い言及は『日本読書新聞』1955年1月1日号に見られ、荒瀬自身が「大衆文化、言論史などを研究」と書いている。その後、「コミュニケーション史専攻」という呼称も一定表出するが、「言論史専攻」が最も多い。時期が下っても例えば『読売新聞』1970年10月20日付夕刊には「言論史」、『週刊読書人』1972年4月10日号には「言論史専攻」と付されている。この時期には、荒瀬は「たまたまジャーナリズム史を研究対象としている⁽⁸⁴⁾私」と述べ、「思想史に関心をもっている一人⁽⁸⁵⁾」とも表記している。

結局、荒瀬のジャーナリズム／ジャーナリスト像を突き詰めてゆくと、「論理をキチンとつらぬくこと以外に、言論人の第一条件と呼べるものはない」という一文に突き当たる⁽⁸⁶⁾。これに「ジャーナリズムにとって重要なのは現実の状況の基底を見抜き批判する論理⁽⁸⁷⁾」という荒瀬の主張を照らせば、言論人に求める論理とはいかなるものかが明確となる。そうした現実状況の基底を洞察する批判こそが「自由の伸張⁽⁸⁸⁾」と主体性を育む「思想形成の意欲⁽⁸⁹⁾」をもたらす契機になる。これが荒瀬の抱くジャーナリズム史／ジャーナリズム思想の視角であろう。

荒瀬の具体的なジャーナリズム批判は次章で検討するが、彼はこれらの理念を単に抽象的に留めているわけではない。「抽象的、観念的に人間とは何かと考えつづけているのなら、ジャーナリストとしてはこれほど愚劣なことはない、と私は言いたい。ジャーナリズムが形而上学ということになるゆえんは、つねに具体的な事象を手がかりとして人間社会を永遠の相のもとでの思考へと送りこんでゆく作業だ」と述べているからである。ここで登場した「具体的な事象⁽⁹⁰⁾」とは、荒瀬のジャーナリズム論でポイントとなる状況という言葉と同じ意味を指すと考えられる。

状況とはアクチュアリティと言い換えてもいいだろう。英語でいうところのアクチュアリティは、ドイツ新聞学の系譜を引く戸坂潤や和田洋一にも強く意識されていた対象であった⁽⁹¹⁾。荒瀬も、アク

チュアリティがジャーナリズムの生命であるという戸坂の特徴づけを引きながら、ジャーナリズムに関して表現伝達者・認識者・客体の「三因子を包む状況という因子を考察からはずすことができない」と述べている⁽⁹²⁾。映画評に荒瀬が書いた「現実⁽⁹³⁾は、作者がそのなかのどこかに視座をすえて、特殊な状況を問題とするかぎり⁽⁹⁴⁾で、はじめてそれを切りさくことが可能となる」(傍点は原文)という一文を見れば、思想・思想性が要請されるという彼のジャーナリズム概念のイメージが明確となる。

そして状況に対して思想をもって向き合うという荒瀬が考えるジャーナリズムの原像はいくつかの文章によっても窺うことができる。すなわち投書に見出せる「当面する状況にたいし、ぜひともこれだけは語らねばならない、と最小限の文章量にもっとも充実した提言を試みるこそジャーナリズムの始源⁽⁹⁴⁾のすがた」であり、定期刊行物の存在が即座にジャーナリズムの成立を意味するのではなく「自己を現実の状況と対置して印刷メディアを思想の表現手段としたときに、はじめてジャーナリズムが成立した⁽⁹⁵⁾」のである。

状況に対峙する力強さがジャーナリズムの特徴・独自の役割を担保するというのは、ワルシャワ・ゲットーという極限状況の中で地中にミルク缶を埋めたシオニスト運動のジャーナリスト体験を有する歴史学者のリングェルブルムへの荒瀬の言及にも示されている。ドイツ軍の「占領下とゲットー内の動向を日を追って記録した」リングェルブルムの覚書きがなぜ力をもつのか。それは「時へだててのちからの回想によってはけっして生れることのない具体的な記述が一日ごとにかさねられてある」からである。作家の日記のように「内面の省察を目的」とした記録とは異なり、「これだけは日付をつけて残さねばならないという本質的な変化と予測だけを書く精選の作業を経て」ジャーナリズムは役割を全うするという考え方がここには表現されている。ゆえに生きて帰ることのなかったリングェルブルムのミルク缶に託される「手渡されなかった日日のメッセージ群を、私は今世紀ジャーナリズムの最高作品の一つ⁽⁹⁶⁾」と荒瀬は見なしたのである。

以上の例からもわかるように「ジャーナリズムの本質は状況にたいする批判にある。事実の報道が第一任務とされるのも、状況に批判的にたちむかうために誤りなく現実をとらえる必要があるからだ⁽⁹⁷⁾」と荒瀬が述べるごとく、ジャーナリズムが状況に対峙するとき、そこには批判が立ち上がる。かくて荒瀬の記した「日本では、明治10年代の自由民権運動に呼応して民権派の新聞・雑誌が政治・社会批判をおこなったのが、ジャーナリズムの起りといえる⁽⁹⁸⁾」という日本近代のジャーナリズム発生⁽⁹⁸⁾の地点にたどり着くのである。

そこには当然ながら「政治・社会批判」という批判対象が明記されている。日本の言論史において「言論活動の自由が百%みとめられたときはほとんどなかった」ことを前提としながらも「権力の座にあるものにとって、自由な批判を展開する新聞こそは、支配の永続をはばむ最大の障害物である⁽⁹⁹⁾」という部分に古典的な権力批判を使命とする新聞像がある。

それは「政治批判というジャーナリズムの本質的な役割」という一文にも見られ、「知力を不断にとぎすませて権力が作為する政治言語の欺瞞に抗する仕事は、解放のための日常的な課題⁽¹⁰⁰⁾」であることを説いている。ただし、そこでいう政治とは単純に政府批判に限定されるものではなく、「人間の人間にたいする支配に関連して用いられるとき、あらゆるものが政治なはたらきを帯び政治的な意味をもってくる⁽¹⁰¹⁾」というように人が人を支配する様々な政治現象を批判の対象としていること

に注意しなければならない。

加えて荒瀬のジャーナリズム論で希求されたのは批判の継続性である。それを一番よく示しているのは「ジャーナリズムについてもっとも重要なことは、一発の速報でもなく、一遍のスクープでもない。持続的な批判の姿勢こそが a journal と journal-ism とを区別させる」という一文である⁽¹⁰²⁾。その他にも、ジャーナリズムは「一発勝負の仕事でなく継続性に意義のある思想活動」であるとか、ジャーナリズムは「持続によって意義を累乗してゆく仕事」⁽¹⁰³⁾という記述を見れば、彼の打ち出す論点は明らかであろう。

ことさらに荒瀬がそう主張するのは、日本の「新聞が政治の欺瞞を暴露できないのは抵抗を「持続する」伝統がないから」であり、絶えず「広報紙への傾斜」に引きつけられるからである⁽¹⁰⁵⁾。日本のジャーナリズム批判の実態とは、「権力の本姿があらわれだすそのときに新聞ははやくも「流れは変わった」と報ずる」ものでしかない⁽¹⁰⁶⁾。であるがゆえに「明治十年前後には、しぶとく、しつこい言論がむしろ主流だったということは、思い出す価値のあること」であり⁽¹⁰⁷⁾、「延々3ヵ月以上にわたって、ときの国政論、外交論をつづけた明治時代」に見られた新聞の「強靱さ」を顧みる必要性を論じたのである⁽¹⁰⁸⁾。

有山輝雄は、メディアとは「つねに現在の出来事、今ここにあることを伝えている。われわれの意識を現在の出来事、今ここにあることに集中させることで、歴史を忘れさせる装置がメディアである。歴史を忘れることによって、現在ばかりのまへのもの」となると書いている⁽¹⁰⁹⁾。だからこそ、歴史を忘却するメディア装置の作用を断ち切り、批判継続の芽を見出していくことにジャーナリズム史研究の役割があるといえるだろう。それは次章で検討するテーマになる。

3 マス・メディアとジャーナリズムの緊張関係

詰まるところ荒瀬が強く意識していたのは、ジャーナリズムの独自の役割である。その考察を進めるために、本節では、荒瀬がジャーナリズム論として展開したマス・メディアとジャーナリズムとの緊張関係に焦点をあてる。ジャーナリズム研究に新境地を開いた林香里も「マスメディアとジャーナリズムは、相互に緊張関係を持ちながら協調と摩擦」を繰り返すことに問題を設定しているが⁽¹¹⁰⁾、少なくとも林の『マスメディアの周縁、ジャーナリズムの核心』には荒瀬豊の先行研究への言及は皆無であり、荒瀬の論点を踏まえれば、さらに議論が深められるのではないか。

荒瀬はジャーナリズムというものをマス・メディアの単なる部分概念として見なさなかった⁽¹¹¹⁾。それは「マス・メディアの部分概念と解したのでは片づかない問題がつづくから」であり、「ここ一世紀余のマス・メディア潮流の規模と速度のアクセル化にどう拮抗してゆけるかということが問題の中心である」と述べている。荒瀬は、マス・メディアとジャーナリズムを「たがいに両方向へ牽引しあう緊張の関係とみたばあいに、機構と精神活動の動態がよく理解できてくるだろう」と以下のような図を掲げている⁽¹¹²⁾。



図1
(注) 荒瀬「ジャーナリズム論のために」『新聞学評論』34号, 1985年9頁。

上記の図は、マス・メディア界の「態度選択の局面」が内側に配置され、外側には傾向性が示されている。内側の個別事項は時々により重点の置き所が変わる。「外殻の動因は強く、内部に近づくほど未生の度合い」を増し、例に用いられたものと反対物が外側の基本動向と照応しあうことも起きうる、と荒瀬は解説している。全ての項目について荒瀬が詳細な説明をしているわけではないので、ここでは荒瀬の他の文献にも手を広げ、可能な範囲で多少の補足を試みる。

まず外殻としてマス・メディアの傾向性に挙げられている「量の拡大」「機能化」「画一化」「組織体の効率」とは、巨大なマス・メディア産業を志向する企業の組織・制度化の力学を示していると考えられる。逆に、ジャーナリズムの傾向性に挙げられている「質の相乗」「機能化」「個別化」「集団化」というのは個々人のジャーナリストの主体性と創意が発揮され、かつそれが集団の連携として機能するような調査報道のイメージを想起させる。これはキャンペーン広告に代表されるように「カネにもの言わせてなされる」「横断的なメディア動因を統合的な方策」とするのに対して「精神内容において個々の特性をいかして相乗の全体性を実現しようという「総合」とは対置させるべきもの」と荒瀬が述べている部分と対応している⁽¹¹⁵⁾。

それでは内側の個別事項はどうであろうか。「署名分析記事」は「アメリカではニュースは責任ある個人が責任を明示して語ることが通例⁽¹¹⁶⁾」とあるようにジャーナリズムへの親和性をもちうるが、一方で荒瀬はジャーナリズムの匿名の表現形式とは「新聞なり雑誌なりにつどう者すべての共通意思の表明」という理解もしており、批判の姿勢から程遠いNHK解説委員室の「対照的な実名の無意味さ⁽¹¹⁷⁾」を挙げているように、傾向性と比べてやはり「未生の度合い」が増すことは確認されよう。「広報的な報知」は、荒瀬がいう「新聞の本務は公式の官製報道を吹っとばすようなホンネを私的に聞いて報ずるところ」にあり、それと「広報機関」に成り果てることと対比している部分から理解ができる⁽¹¹⁸⁾。

ニュース速報を意味する「フラッシュ・ニュース」に対して、「長期的に読みつがれて影響を徐々にひろげてゆく」「ルポルタージュ」がある。それぞれ微妙な意味は異なろうが、「祭儀的ステロタイプ」と「状況の細密描写」、「ソフト・フォーカス」と「パン・フォーカス」もジャーナリズムの

方は、実態・実質を詳しくかつ明確な視点で迫ろうとし、マス・メディア側は批評性が薄くなるといえるのではないか。「パナータイトル」は見出し何段抜きという効果と大量性に関係があり（荒瀬談2）、「諷刺的な批判」は上記の通り本質をえぐる批評性に連なるものである。

また荒瀬は「ゴシップ」と「スキャンダル」の本質的な差異に注意が払われていないことに警鐘を鳴らしている。ゴシップとは「政治支配関係とは切りはなして私行を話題」にすることであり、ゴシップの追求は「支配関係を意識させない」方向に作用し「現実の支配関係を強化する機能」を果たす。それに対して「権力者の物欲と性欲」によって生じるスキャンダルは「多数の他者の生存を危うくするものとして徹底的に暴露され追求されねばならない」と主張している⁽¹¹⁹⁾。

「案内3行広告」には「貸間あり」といったような目に見える市民同士のメディアという性格があり（荒瀬談2）、「記事とおなじくその内容で読ませる報知」の系譜にあるものである⁽¹²⁰⁾。対して「イメージ広告」は市民同士のメディアという色合いは減じ、企業広告の姿を取る。「専門担当の菌車化」と「アマチュア性の格闘」では、ジャーナリストは生活者たる読者の側に立って言論活動を行うために「いつでも素人としての発想と視点とをもちつづけていなければならない」という荒瀬の記述から⁽¹²¹⁾、「アマチュア性の格闘」がジャーナリズム側に配置されることが理解できよう。

以上のようなジャーナリズムとマス・メディアの参照軸を荒瀬が丁寧な腑分けとともに提起したことで、ジャーナリズムに固有の役割を考察しうる足場を荒瀬は形成したといえる。荒瀬が理念型としてジャーナリズムをマス・メディア／マス・コミュニケーションと緊張関係にある構図として考えていたことは、「マス・コミュニケーションは、内容なき新奇性を、無限に更新される消費性向のためのアクセサリーとしながら、その内実においては大衆の思想傾向を吸いあげては吐出しつつ本質的な保守的機能を継続してゆく」という記述からも明らかである⁽¹²²⁾。ここには当然ながら荒瀬がジャーナリズムに見出す現状を変革する批判性は見出されない。大阪のスラムに住んで周囲の人と生活をともにして歌をつくった一時期の岡林信康による批判性をもつフォークソングと、南こうせつらの「神田川」を「既成の流行歌へのおもねり」とした荒瀬の各々の位置づけは、そのままジャーナリズムとマス・メディアとの相似形を投影したものといえるのである⁽¹²³⁾。

最後にこれまで論じたジャーナリズムとマス・メディアの緊張関係の視座を意識しつつ荒瀬のジャーナリズム論を対比するために佐藤卓己と林香里の視点を検討する。まずは佐藤卓己の以下の文章を引く⁽¹²⁴⁾。

ジャーナリズム史は教訓的歴史への志向が強く、マス・コミュニケーション史は実証的歴史学を目指していたといえるかもしれない。そしてメディア史になって研究者の位置拘束性^{ポジショナリティ}が問われる批判的歴史学となった。つまり、新聞時代のジャーナリズム史は国民的事件で重要な役割を果たした記者の英雄叙事詩、あるいは国家権力に対抗しつつ言論の自由が獲得された理念史として記述されてきた。テレビ時代のマス・コミュニケーション史は、そうした理念偏重には批判的であり、発行部数や視聴率などの数量的分析で成果をあげてきた。これに続いて登場したメディア史とは、理念と現実を対比しつつ総合する立場といえよう。またジャーナリズム史やマス・コミュニケーション史が新聞や放送が社会に与えた影響を主に記述してきたとすれば、メディア史はむしろ社会とメディアの相互作用を分析している。

佐藤はメディアには「報道、評論、教育、娯楽、広告の五つの機能があるといわれている」ということ押さえた上で、「「メディアはそもそも広告媒体」と考えると理解しやすい」と述べている。⁽¹²⁵⁾これはそもそもマス・メディアという言葉が広告関連の業界用語として登場した文脈を踏まえての説明でもあるが、それに「メディア論とは究極的にはメディアの効果論である」という佐藤の文章⁽¹²⁶⁾を合わせて考えると、これまで考察してきた荒瀬の対照図からいえば、論理的には「量の拡大」「機構化」「画一化」「組織体の効率」の傾向性を有するマス・メディアの方角に軸足がいき、ジャーナリズム固有の役割への視点を希薄にしてしまう問題があるのではないかと考える。

佐藤が述べるように、メディア史が強く意識する「比較メディア論」⁽¹²⁸⁾の観点には共感するが、荒瀬のジャーナリズムとマス・メディアの緊張関係に関する詳細な考察に比べると、ジャーナリズム史とマス・コミュニケーション史を総合するのがメディア史であるというのは、いささか性急な止揚像なのではないかという疑問が生じる。また荒瀬に限れば、民衆思想の視点と知識人への距離感をもつ立場からは単なる「英雄叙事詩」という叙述にはなっておらず、「言論の自由が獲得された理念史」ではなく「言論の自由」を獲得できなかった論理を考究している。「ジャーナリズム史は教訓的歴史への志向が強く」といった若干消極的とも見なせるような記述は、佐藤の「過剰な政治主義」⁽¹²⁹⁾への警戒に関係があるのかもしれない。だとすれば、その危惧は理解できるにせよ、林香里がいうように「ジャーナリズムがもつべき理念ないしは思想への十分な検討なくしては、現代社会における主体的ジャーナリズム活動の蘇生および革新は実現不可能である」⁽¹³⁰⁾という提起も同時に顧みる必要があろう。

その上で佐藤が「ジャーナリズム史は教訓的志向が」強いと論じたのは、林が整理するように、これまで一方では「ジャーナリズムとは民主主義社会における言論の自由を保障する原動力であり、民主主義の心臓部であるとする」「マスメディアはこうあるべきだ」という規範論が強く、他方では「マスメディアとはこういうものである」という実態論があり、両者の研究が乖離していたという点にも由来しよう。⁽¹³¹⁾林がいうように「仮にジャーナリズムに与えられるべき社会的「規範」を発見したとしても、それが社会の他の諸現象といかなる連関をもつことになるのか」という論点は、⁽¹³²⁾荒瀬の理念重視のジャーナリズム論も批判的に検討する余地があることを物語っている。その課題は、次章で触れる実態論と規範論が折り重なりながら展開される「新聞の戦争責任」というテーマにつながるのである。

③……………ジャーナリズム批判

前章で見てきた荒瀬のジャーナリズム論に立脚して、いかにジャーナリズムの批判がなされたのか、最初に日本近現代のジャーナリズム史における「1 言論の責任」と「2 新聞の戦争責任」の問題を考察する。次に「3 批判の方法」では、荒瀬がジャーナリズム批判を行う方法が論理への徹底性に求められたことを明らかにする。

1 言論の責任

荒瀬のジャーナリズム批判の出発点・原点となった論文は「新聞形成の独占過程」『思想』1955

年2月号]である。荒瀬は、1889年の帝国憲法発布から論を進める。憲法の内容を知らないままに「奉祝」のムードだけ高まっていく東京全市の状況を皮肉る『ベルツの日記』の内容に触れ、民権の主張を掲げた政論新聞が弾圧され「企業経営を主とする新聞が、新しい時代の言論機関として成長」する地点からジャーナリズムの歴史を紐解いていく。そこに見られるのは「憲法についての批判や論評よりも、速報によって部数拡張に役立てることこそ」を至上とする商業新聞の在り様であった。⁽¹³³⁾

その商業新聞が掲げていく「不偏不党」や「公平無私」とは「一貫性ある言論の放棄」に他ならず、「この原則を守るかぎり新聞自体の責任は読者の追及から免がれ、自由主義の主張者らしい紙面がいつしかファシズムの宣伝道具と化していても、つねに外部だけに責任を転嫁」できる強固な論理となっていく。⁽¹³⁴⁾「不偏不党」の美名とは、有山輝雄が位置づけるごとく「権力に対し正面から批判する精神を失い、企業の安全の範囲内での言論報道を行うメディアのイデオロギー」の別名であったのである。⁽¹³⁵⁾

1918年には、寺内内閣が米騒動の報道を禁じたことに対して抗議を強めていく新聞社の中で、兵乱の予兆とされる「白虹日を貫けり」という記事の一文を記した『大阪朝日新聞』が標的とされ、言論史に残る白虹事件が起きる。⁽¹³⁶⁾それまで寺内内閣への批判を展開していた『大阪朝日新聞』は、この筆禍事件により鳥居素川、長谷川如是閑、大山郁夫、丸山幹治らの記者が退社に追い込まれ、権力に対して全面的な屈服を社説で表明する。同じく1918年に『大阪毎日新聞』の社長本山彦一が「新聞は商品なり」と述べたのは、戦前のジャーナリズム史の大きな曲がり角を逆の側面から照射した言辞であった。

そして荒瀬は、憲政擁護運動、米騒動、普選要求運動に至る記者大会の宣言・決議文を比べ、憲政擁護運動においては新聞人の「民衆と自己とを同一視している主体的なひびきがある」のに対して、米騒動では「言論人は民衆の運動とまったく絶縁」され、単に新聞のための「報道の自由」を主張するに留まっていることに注意を払う。すでに米騒動の時点で民衆の「解放のための運動」と新聞人が求める「言論の自由」は切り離され、「見のがすことのできない重要な差異」と「政治性」の変化が「新聞人自身も十分に意識しないままに進行」したことを見抜いていた。⁽¹³⁷⁾

そもそも荒瀬は1954年という早い段階で、「朝日」成長期の重要な販売政策の一つとして、皇室中心主義をとり国民の旧意識に迎合して部数を増そうとしたことは、とくに注目に価する」と述べているように、⁽¹³⁸⁾天皇制とともに並走した商業新聞の歴史に視座を定めており、それは1975年に書かれた『朝日』は、なんとしても保守政党の支配のなかで柔かい政策をおこなってほしい、という線を政党政治がこの国にはじまって以来の伝統的な基本方針としている」という一文にまで引き継がれている。⁽¹³⁹⁾

その際、荒瀬のジャーナリズム批判の出発点となった「新聞独占の形成過程」で「一貫性ある言論の放棄」と「新聞自体の責任」が問われたとき、責任とは何であるのかが検討されなければならないであろう。荒瀬は、小松川高校事件を論じた「民衆と責任の問題」で、「責任は、法的、政治的、あるいは社会的に制約された位置にあって、しかもなお各人の自由によって選ぶ領域が存在し、そこでその行為の選択が他者の生存にかかわりをもつという場ではじめて問われ意識される」ものであると説明している。そこで荒瀬が想定する責任とは、機構が求める「法規、命令、社会規範への

離反」の責任ではなく、「自由の領域の拡大において」問われる「人間としての責任」である。⁽¹⁴⁰⁾かくてジャーナリズムが「言論の自由」を標榜するのであれば、以下の荒瀬の問いかけを避けて通ることはできまい。⁽¹⁴¹⁾

ジャーナリストの悲劇性は、他者へのコミュニケーションをつうじて、情勢を幾分かでも動かし得る、というその可能性にかかっている。「読者のため」の朝日だとか、「社会のための責任」だとか勝手に意味内容をすりかえることのできることをばを吐くまえに、社友は社友としての責任を論説委員は論説委員としての責任をジャーナリストはジャーナリストとしての責任を状況にたいしてはたすべきである。新聞人が自己にたいして責任を明証することなしに新聞の責任がとげられるはずがない。自己のおかれた機構内の位置において職業としての使命に賭けることのできないような人間が「自由」を語る資格があるかどうかを私は疑い続ける。

1964年という時点で荒瀬は同じ問題を考え続けていたようである。「放送制作者の社会的責任」という文章で、責任回避に一番使われる口実は「客観的な情勢とか、あるいは命令とか、外部からの条件にすべての問題の根源を求めていく」ものであり、その最たる例に「戦争過程における日本の言論人の責任の問題」が挙げられている。⁽¹⁴²⁾このことを踏まえれば、荒瀬が提起した問題の幾分かは、『朝日新聞』が自社の戦中報道を検証した『新聞と戦争』で「戦後、新聞社の幹部らは、軍部に抵抗しきれなかった理由に、「従業員やその家族の生活」や「新聞社の存続」を挙げた。だが、新聞の戦争への影響力を思えば、通用しない言い訳だ」と明記したことは意義をもつ。⁽¹⁴³⁾荒瀬が提起した問題の幾分かは、40年以上も後に刊行された『新聞と戦争』において「通用しない言い訳」と断言されたことで果されたといえる。⁽¹⁴⁴⁾

2 新聞の戦争責任

以上に述べてきたことから明らかなように、とりわけ「言論界の戦争責任の追及を隠蔽」するならば「自由は死滅への道を歩むほかないだろう」と強い調子で荒瀬が述べるごとく、⁽¹⁴⁵⁾荒瀬が重きを置いたのは新聞の戦争責任・戦後責任である。⁽¹⁴⁶⁾それは「アジアの諸民族にたいする日本の戦争責任」であり、荒瀬がジャーナリズムに求めたのは「みずからの過去を、みずからの手で正しく批判し清算すること」ないし「言論機関としての戦争責任と戦後責任をみずからの手で糾明」すること⁽¹⁴⁷⁾であった。

なぜ荒瀬が戦争の問題にこだわったのかといえば、「戦争が、われわれ一人一人の体験のなかで状況との対決を極限的に余儀なくされた経験でありつづけているというだけでなく、民族的なひろがり、また人類的なひろがり、政治と人間とのぎりぎりのドラマを体験した一時代であった」ということの意味は、今後どのような平和状態がつづこうとも失われることはないだろう」と考えるからである。⁽¹⁴⁸⁾

とはいえ荒瀬がいかに「アジアの諸民族にたいする日本の戦争責任」に問題意識をもつようになったのか実はよくわからない。筆者が調べた限りではここに引いた「国際問題と日本のマス・メディア」⁽¹⁴⁹⁾〔『別冊法律時報』1号、1957年2月〕が一番早い事例であると思われる。当然、荒瀬の戦時中の

体験と、1956年から盛んになった知識人の戦争責任論、『昭和史』論争、「戦中派」論争の時代背景があったことは疑いえない。⁽¹⁵⁰⁾「❶思想形成」で論じた「現実と学問をつなぐもの」からもラティモアやスノーの文献を読み、「中国問題についてラスキ夫人の持っている態度」といった言及程度⁽¹⁵¹⁾しか手がかりはない。

これは推測になるが、荒瀬がジャーナリズム批判の出発点の仕事として位置づけられる「新聞独占の形成過程」と同じ『思想』1955年2月号に掲載された「日本新聞史年表」の準備が荒瀬に一つの見取図をつくる上で一定の役割を果たしたのではないかと考えられる。この「日本新聞史年表」は荒瀬の編集により作成されたもので、1861～1954年までの時代をカバーし、「政治・社会」、「新聞・通信」、「言論・文化」の3項目の事象が18頁に及んで書かれている。1954年4月に東京大学新聞研究所に就職し、研究者として生きることになった荒瀬にとって「新聞独占の形成過程」を書くための準備になったのは無論だが、この年表作成という基礎作業を通して改めて新聞の戦争責任を再考する第一段階になったのではないかと思うのである。

その「新聞独占の形成過程」の続編として位置するのが「日本軍国主義とマス・メディア」[『思想』1957年9月号]である。「新聞独占の形成過程」では「民衆の政治要求と一体化した場合の言論の自由の主張と、報道企業のためだけの自由の要求」が入れ替わっていくことを明らかにしたのに対して、⁽¹⁵²⁾「日本軍国主義とマス・メディア」では新聞の政党政治を要求するための軍部批判と、軍部批判を磨滅する「満蒙權益の擁護」の主張が後者に転倒していく言説過程を考究した。⁽¹⁵³⁾

そして戦時中に見られた「權益擁護」の主張は新聞が自らその矛盾を解決しなかったことで潜在的にその問題を温存させており、「戦後も東南アジアや中国を「市場」としてしかみない新聞の主張」に継承されている⁽¹⁵⁴⁾として先に発表されたのが、既述してきた「国際問題と日本のマス・メディア」である。この論文では敗戦後初めて全国紙に掲載された戦後外交論の記事である『朝日新聞』1945年8月23日付の「対外政策の座標」が組上に載せられ、⁽¹⁵⁵⁾アジアへの日本の戦争責任と「アジアにたいする蔑視と無理解、国民外交と民族生存権についてのプログラムの欠如」といった「新聞人の世界像の基本的な特長が、^{ママ}すべて戦争中の世界像の延長であること」に注意を促している。⁽¹⁵⁶⁾

しかも1958年という比較的早い段階で、荒瀬は「満州事変」以降だけでなく「朝鮮、台湾併合以来の植民地についての日本の言論を検討する必要がある」という見解を表明した。⁽¹⁵⁷⁾この「亜細亜」は生きている一言論人のアジア観」という題名自体にアジアへの明確な問題意識が荒瀬に定着したことを窺わせる。また「アジアとの連帯」という反対しようのない言葉の唱和に本土人が慣れきって「沖縄の日本復帰」を溶けこませるなら、これほど不遜な行為はないと批判し、「アジアの一員」という言葉を空語に帰さないためには「われわれが加害者としての関係で対したときの被害者を、はつきり^{々々}他者として描き出し、その苦痛をとおしてわれわれ自身を変革してゆくこと」⁽¹⁵⁸⁾(傍点は原文)を提起する。

こうした植民地支配責任をめぐる射程をもった彼の考え方は一貫しており、1966年には「朝鮮と琉球をめぐる係争は、アジアにたいする日本のあり方を問う直接の主題であった」として日清提携論をも唱えた『近事評論』⁽¹⁵⁹⁾に言及し、⁽¹⁶⁰⁾1972年においても「満州事変以降のみならず、近代日本は一八七四（明治七）年の征韓論と台湾征討いらい隣国を土足でふみにじることを平然とおこなう習性をかさねてきた。この歴史についての根本的な反省なしには、アジアの信頼を回復すること」

はできないと述べている。⁽¹⁶¹⁾

さらに先に引いた「亜細亜」は生きている」で荒瀬が問題としたのは『ビルマの豎琴』であった。この『ビルマの豎琴』こそ「古いアジア観の残存と変容」を象徴的に見出せるものであり、約10年に渡り同作品が多く読者によって読まれながらもそこに含まれる「民族のエゴイズム」と「古いアジア観」を問題視する声を読者から生じない現状を批判した。ジャーナリズムだけでなく人びとの戦争責任にも対峙する問題意識があるからこそ荒瀬は「日本の過去を問うためには、アジアの諸民族を敵としてきた経過に、日本人自身がこだわりつづけて、われわれ自身の手で過去の継続を食いとめなければならない」と述べるのである。⁽¹⁶²⁾

しかし日本のジャーナリズムは敗戦以降も根本的にはその性格を変えることはできなかった。1945年10月4日に人権指令が出されるまで「自国の統制法規の廃棄を主張する」活字が全くあらわれなかったこと自体、ジャーナリズムが「桎梏を桎梏と感じ」ない「みずからが本来は自由であるべき人間だと悟ることがない」「奴隷」状態のままで再出発したことに他ならない。ジャーナリストの活動にとって「自由という問題」が「その死活に結びつく重要な課題」であるという理解がなされぬまま戦後のジャーナリズムの歩みが再開されたことを荒瀬は見逃していない。それは敗戦時に見せた「占領軍兵士むけの慰安婦協会の設立にのりだした業者や末端の官僚、英会話のテキスト・ブックを刷りはじめた印刷、出版人」の「国際感覚」と対応したものであったといえよう。⁽¹⁶³⁾

ただし荒瀬の批判は決してジャーナリズムや他者だけに切っ先を向けて安住するものではなかった。敗戦を中学4年で迎えた荒瀬は、例えば戦勝祝賀祭や学徒出陣といった同時代の状況の中で歓喜する側の一員であったことを省み、「この恥辱感を自己にむけていつまでも深くほり下げることによってしか、わたくしは人間としての道をたどりえないように思う」と記している。⁽¹⁶⁴⁾戦後になって初めて横浜事件を知ったときに「無知のまますごした歴史への悔いと怒り」が荒瀬に生じたことも前述した通りである。

このようにジャーナリズムの戦争責任と自己の問題を串刺して論究してきた荒瀬にとって「戦争をなくすべき対象とすること」、「その廃絶をわが思考と行動の課題と考えること」は当然であった。「NHKの映像にアウシュヴィッツと南京大虐殺」が初めて登場したと思われる荒瀬が述べた番組評で、その「制作者の情熱に打たれつつも」、戦時中に南京大虐殺を打電した森恭三を含めて識者の感想で誰からもプロテストや抵抗という言葉が聞かれなかった点に「決定的な不満」(傍点は引用者)を覚えたことこそ、荒瀬のジャーナリズム思想が何よりもプロテストと抵抗を重視していたことを明示している。⁽¹⁶⁵⁾

3 批判の方法

プロテストと抵抗という言葉が出てきたところですでに引いた荒瀬の「ジャーナリズムにとって重要なのは現実の状況の基底を見抜き批判する論理」であり、「ジャーナリズムの本質は状況にたいする批判にある」という文章をとらえ返せば、再び批判という語句が焦点を結ぶ。ではなぜジャーナリズムにとって批判が必要なのであろうか。

荒瀬の言葉に即せば、混沌たる現実の認識と表現を任務とするジャーナリストが現実像をとらえるためには「不断に否定の契機」という批判的営為が求められるからである。ジャーナリストの内

部に「現実以上に豊穡な現実像が存在していないかぎり」「刻々の変化をとらえる眼をもつことができない」。なぜならば「固定した現実像によって把握が可能なほどに現実⁽¹⁷⁰⁾は固着したものではなく、またそれほどに空虚でもないからである」。

それに加えて荒瀬の「論理をキチンとつらぬくこと以外に、言論人の第一条件と呼べるものはない」という一文を思い出す必要がある。荒瀬にとってジャーナリズムを批判する方法とは、「言論人の第一条件」たる論理を読み解くことに他ならないからである。そのことを敗戦直後のジャーナリズムに関する荒瀬の批判的分析から具体的に考察していくことにする。⁽¹⁷¹⁾

敗戦直後のジャーナリズムで荒瀬が目にするのは、東久邇首相の記者会見である。そこで首相は「一億総懺悔」を提唱し、戦争責任を「国民のがわに転嫁」しようと試みた。荒瀬は「この発言が問題を「敗戦責任」に限定しており、しかも当時はだれもこのことを怪しまなかった」という点を衝く。そして実はこの首相発言を引きだしたのは、戦争の敗因を明確にすべきではないかという記者団からの質問であったことに触れ、敗戦直後に見出される開戦責任を問えなかったジャーナリズムの論理を以下のように摘出するのである。⁽¹⁷²⁾

日本のジャーナリストが用意した質問が、敗戦の原因をきくという限られたワクのなかでの事実認識の問題にとどまっていたということである。「終戦」というシンボルから「開戦」にさかのぼり、「原因」を「責任」考察の立場から追及するという態度は、みられなかった。

上記は1959年の文章であるが、この敗戦直後のジャーナリズムの在り様に対して「戦後の原点」を確認するために分析を尽くしたものが1974年に発表された「占領統治とジャーナリズム」である。そこでは多くの記者が降伏の確報を知る1945年8月14日の夜の情景に焦点があてられる。毎日新聞社大阪社会部の藤田信勝による日記の内容が引かれ、酒が汲みかわされる中、「最後の夜！歴史的な夜！OK！」という興奮に社会部は包まれる。この騒然は社内では例外であったようだが、荒瀬はこの「OK！」という語をとらえて「現実を変えたり情勢から離脱したりする意思を示してはいない」と指摘する。⁽¹⁷³⁾ いうまでもなく敗戦時に朝日新聞社を退社したもののたけじは新聞記者の中で異例の少数者であり、荒瀬はむのが選択した「消極的」協力を理由にして自己を免罪し、ふたたび権力に迎合するという、のちに多くの言論人がとった語法を遮断する論理⁽¹⁷⁴⁾を照らすのである。

そうした情勢において荒瀬が目にしたのは、数日紙面の2面を白紙で出した毎日新聞の西部本社⁽¹⁷⁵⁾の動向が『毎日新聞百年史』（1972年刊行）に掲載されたことである。この西部本社の対応は、戦争を謳歌・煽動した同じ編集者によって紙面を大転換する偽善に耐えられない者の行動によった。ただし、結局進言した者の辞表だけが受理され、他の幹部らが責任をとらなかったことから荒瀬は「八・一五に戦争責任を問うた新聞人があったことを記録したことの意義は大きい。しかし、その功は同時にその問題提起に答える論理も行動も自社からは生れなかった」という「言外の告白」として「戦後の開幕」についてのジャーナリズムの姿勢の原型⁽¹⁷⁵⁾を看取した。

さらに朝日新聞社の論説として著名な「自らを罪するの弁」と「国民と共に立たん」の検討に及ぶ。「自らを罪するの弁」は『朝日新聞』1945年8月23日付の社説であり、新聞紙面において初めて新聞の戦争責任が問われたものである。その社説上の「特に国民の帰趨、輿論、民意などの取

扱に対して最も密接な関係をもつ言論機関の責任は極めて重いものがある」という文章をとらえて以下のように解析する。⁽¹⁷⁶⁾

まず国民の「帰趨」を先立てて「民意」を最後にあげしかもそれらの取扱いをわが任務とのべていることは、人民の発言を掲載するとか人民の意思を代弁する機能を負うのでなく、国民動向を操作する支配の具としての考え方を脱却していなかったことを物語る。

無論、荒瀬は社説で戦争責任を公示した意義を認めている。それゆえに「その責任論の論理構造がふくむ問題」を重視する。つまり自らの戦争責任を認めながら、以後も言論機関の重要性を自認する両義性を抱えるこの社説に対して「じつは「自らを罪する」姿勢を示しながら一方で責任の追求対象を拡散しつつ他方で追求の動きを歯どめする^{ママ}という、責任論の空洞化をその発言のなかに内包する問題提起」であったと位置づけるのである。⁽¹⁷⁷⁾

続いて『朝日新聞』1945年11月7日付の「国民と共に立たん」の宣言文に書かれた「今後の朝日新聞は、全従業員の総意を基調として運営さるべく」という文章も荒瀬は見逃しはしない。「全従業員の総意」を「を基調として」ということばを用いていることが、「新陣容」のエリート性をあらわしてもいた。旧首脳から禅譲された幹部たちはけっして、全従業員の総意を新聞の紙面とするとは言わないのである⁽¹⁷⁸⁾と喝破した。

これらのように荒瀬は、言葉の「順列配置」⁽¹⁷⁹⁾に語る者の欲望を読み解く方法を始めとして仮借ない論理追究への徹底性を発揮した。⁽¹⁸⁰⁾ そうであるがゆえに、「占領統治とジャーナリズム」の出だしの文章の意味が想起されなければならない。⁽¹⁸¹⁾

「それで……自由になったのかい」。フォーク・ソングの岡林信康が、一九六〇年代の停滞ムードにたいして、自作・自演の歌で投げかけつけたプロテストの冒頭の句である。自由という問題は、ジャーナリストの活動を考えるばあいに、とくにその死活に結びつく重要な課題である。ただし、与件としての自由がどれほど確保されていたか、あるいは許されたか、と設問することは、じつはジャーナリストの思想・行動を根底から侮蔑することがらである。なぜなら、彼はその活動においてすでに自由の領域を拡大充実することを課題にしているのだから。

およそ学術論文の型を破るような「それで……自由になったのかい」という書き出しに続く文章と、これまで紹介してきた批判内容を照らし合わせれば、それが原理に根ざした根底からのジャーナリズム批判であることが明瞭となる。荒瀬は「政治の場」や「政治権力としての国家」がある限り、規制の要素が消えることはないだろうといい、問題とされるべきなのは「規制と自由との量的な多少」ではなく、自由原則を現実にするために「規制を極小にするという方向性を確保」することであると主張した。⁽¹⁸²⁾ その規制極小に向かえるかどうか、荒瀬の批判に見られたごとく時代の転換に言葉を刻むジャーナリズムの論理が常に試されているといえよう。

おわりに

これまで各章で明らかにしたことを簡略にまとめ、課題を記した上で、民衆思想への問題意識を経て考究されたと思われる「知性人」という言葉を手がかりに荒瀬が目指した思想の方位を述べておく。

「①思想形成」では、荒瀬の思想の原点を示す「現実と学問をつなぐもの」と「おけさ哲学」を関係づけて分析した。鹿児島の七高時代に「思想の核」を築き、大学時代に通ったCIEライブラリーでさらに新しい知識と世界観を培い、新聞研究所で新聞記者を目指すようになる。記者時代には新潟で「裏日本のひとびと」の生活を肌で感じ、民衆思想への関心を深めていく。「おけさ哲学」ではジャーナリズム史研究で発揮される抵抗の性質を読み込む思想史の感度といえるものが早くも表現されていた。知識人への距離感という初心を抱いた荒瀬は研究者に転じて、「現実と学問をつなぐ」道を探究することになる。その問題意識の所在が新聞記者時代までに形成されたことを聞き書きの知見も加えて意味づけた。

「②ジャーナリズム論」では、日本においてジャーナリズムという言葉が1930～1931年以降に定着を見せたことを踏まえた上で、戸坂潤から林香里に及ぶジャーナリズム概念に関する代表的な先行研究を整理した。ジャーナリズムとは現実の状況に批判的に向き合う思想性を有するものという荒瀬の概念理解は、戸坂潤の批評性とアクチュアリティを重んじるジャーナリズム論の系譜を引くものである。日々の記録による具体性をもつ迫力と精選にジャーナリズムの機能が発揮される事例として、荒瀬の着目するリングルブルムが地中に埋めたミルク缶に言及した。それに加えて批判の継続こそ重要であるという荒瀬のジャーナリズム論の力点を明らかにした。次にマス・メディアとジャーナリズムの緊張関係という荒瀬の考察を検討することで、マス・メディアの周縁にジャーナリズムの核心を見出す林香里の研究に対する先駆的な位置づけを明らかにし、ジャーナリズム固有の言論活動による批評的特徴を明示した。

「③ジャーナリズム批判」では、まず荒瀬の歴史研究でジャーナリズム批判の出発点となった「新聞形成の独占過程」を取り上げ、新聞の企業化の過程で「言論の自由」の位置づけに見過ごせない質的変化が起こり、「一貫性ある言論の放棄」が生じていたことを押さえた。特に荒瀬がジャーナリズム史に踏みこむ過程で重視したのは新聞の戦争責任・戦後責任である。アジアへの植民地支配の責任を視野に入れ、自己と日本人の戦争責任に向き合う中で、時期ごとにジャーナリズムの言論責任を掘り下げていく。その批判の方法は「占領統治とジャーナリズム」に集約され、敗戦直後の日本のジャーナリズムがいかなる問題を内包していたのか、荒瀬の論理構造を摘出する徹底性を明らかにした。

本稿は初めての荒瀬豊研究になるはずである。従ってまずは荒瀬の核となるジャーナリズム思想に焦点をあてた。⁽¹⁸³⁾荒瀬の時期的な変化はむしろ少なく、批判の継続を重く見ていたように「おけさ哲学」や「新聞独占の形成過程」に代表される1950年代半ばの原点たる仕事から彼の思想には、状況に向き合う際の主体の両義性（批判・抵抗の発揮と喪失）を探究するという一貫性が強いことが示された。それは1985年に書かれた「ジャーナリズム論のために」がマス・メディアとジャー

ナリズムの緊張関係を主軸に考察されたという一例からも浮かびあがる。その道のりで見定めた実践的な批判性こそが荒瀬に「現実と学問をつなぐ」方角を指し示し、自己の知識人像とジャーナリズム思想を結びつける原理となったのである。

しかし、荒瀬の思想をより深く検討するためには少なくとも政治外交論、大衆文化への関心に貫く民衆思想史、映画評を始めとする文化批評の3項目がどのような相互作用を荒瀬にもたらしたのか分析が必要になる。⁽¹⁸⁴⁾彼の論理と発想に強く影響を及ぼしたと思われる「イギリス型の思考方法」も「現実と学問をつなぐもの」以外に自伝的情報が皆無に近いということと類似して文献面からの追跡は難しい。⁽¹⁸⁵⁾荒瀬が学生時代にCIEライブラリーで書き溜めたノート資料が見つければ、その全容の一部は明らかになるに違いない。「共同意思を相互討論によって形成しうる「組織」と「命令を上から順守させる「組織体」」⁽¹⁸⁶⁾とを区別する彼の組織論も扱えなかった。

無論、論じられるべき課題は山積しているにせよ、最後に彼が言及した「知性人」にまつわるテーマについて若干論じておく。思想史に立脚した荒瀬のジャーナリズム史研究の光源がそこに関わっていると考えるからである。⁽¹⁸⁷⁾

荒瀬は野添憲治との『戦没農民兵士の手紙』をめぐる論争において、「知識ある人」の意味で使われる「知識人」と対比する形で自身の仕事に駆り立てるものに「知性人（知性に立って自己の行動をコントロールする人間）たるべく願う人間としての責任感」⁽¹⁸⁸⁾を挙げている。この「知性人」という概念をこれ以降荒瀬が深めた形跡は見られないが、知性という言葉はしばしば見られ、以下のように理性と比べる形で荒瀬は知性という言葉の意味をとらえている。⁽¹⁸⁹⁾

「理性」という語は、大正以来の教養主義のもとでは、しばしば思弁的・観照的態度の合理化に作用した。これに対置された場合の「知性」は、状況の分析と予見を知識人の課題とし、そこで必要とされる実践の契機を必然的に内包する精神態度を要求する。

荒瀬は、筆者に対して「茫漠となるためアングロサクソンは理性（reason）という言葉あまり使わない。自分はドイツ語を第2外国語として専攻していたが、なじめなかった。状況と切り結ぶ、状況の中で練り上げるものが知性(intelligence)というイメージがある。それに対してそういう細々としたものと関係がないと高みに立っているのが理性であり、理性には神を崇めるにおいがしてしまう」という内容を語っている（荒瀬談2）。つまり「状況の分析と予見」ならびに「そこで必要とされる実践の契機を必然的に内包する精神態度」とは荒瀬自身の問題意識を語ったものに他ならず、それ自体が荒瀬の考えてきたジャーナリズムの思想を定義づける文章であった。

こうした意識は「現実と学問をつなぐもの」から強く見出されたことは既述の通りで、かなり早い時期にレイモンド・ウィリアムズの「現実を論じながらも歴史にあらわれた可能性をこまかく検証」⁽¹⁹⁰⁾する「変革の志向をつらぬいた分析」に注目した所以でもあろう。

それと同時に荒瀬は知識人に一定の違和感を抱いていたといっている。例えば荒瀬は小泉信三の「平和論」に「実践不在という以上に実践を嫌悪する心情」を見出し、『海軍主計大尉小泉信吉』に関しても「海軍好きの子だったと信三はたたえるのだが、兵学校を志願するでもなく、兵卒としての忠誠に没入するのでもなく、三菱銀行に入社してのち在籍のまま「経理」学校に入学するという

才幹こそは、エリート主義の独善でなくて何であろう」と批判を向ける。⁽¹⁹¹⁾ 同じ文献の中でむのたけじの前半生に発想の根源を探った以下の文章はそれと対比するものである。⁽¹⁹²⁾

貧農の子に生まれた彼〔むの〕は、小学校を卒業して畳屋の小僧となるはずのところを、住職が親に意見して中学に進学させた。中学から師範二部にゆくはずのところを、卒業式に出席した父が担任教師の親切に動かされて師の母校、東京外語を受験できた。彼の学校歴は親の資力と寛容の限界ギリギリで成り立ち、しかも知的な隣人の助力が転回点をつくった。志望どおりではなく、可能性の境界線に立つことで全面的な志望達成に賭けるという行為は、就職志望や転社とその後にもつきまとっている。逆説的な状況の転回に賭ける勇氣は「限界人」（マーティナル・マン）のケタはずれの決断を可能にする、と私は思う。

なおも荒瀬は、西田幾多郎を始めとする「求道精神をつらぬいた代表的な男性思想家たちがこぞって、いのちだけを許され恋を捨てた庶民の尼僧の寺〔東慶寺〕に永遠の眠りを願っている姿は、近代日本の知的エリートの甘ったれさ加減を象徴している事蹟でないか」と痛打し、日本の戦争体制を「強制したエリート群」が多くの人びとを無駄死にさせた戦争責任と比べれば「三木清の獄死を放置したことに日本民主主義の不徹底の始点がある」という日高六郎の文章と、それを総合雑誌の巻頭論文に掲げる「エリート主義の独尊ぶり」に批判の矛先を向けた。⁽¹⁹³⁾⁽¹⁹⁴⁾

そうした荒瀬の「エリート主義の独善・独尊」への反発と、状況への批判という意識が切り結ぶ場所が諷刺・頓智の可能性であったのではないだろうか。荒瀬は、演歌師として生きた添田啞蟬坊の歌の特徴は「笑いと怒り」であるとし、啞蟬坊という号に「おし^マのセミ」とはまことに含蓄のふかい自己表現である。語る機会を官憲から押えつけられる状況への抵抗感か、羽ふるわせて全身をしばるほか鳴く音を出せぬ懸命の意思の表現か」と推測する。啞蟬坊の歌に「社会科学の理論も容易にはおよばない痛烈と逆説の凝集ゆえ」の「状況の基軸をえぐる諷刺」を見るのである。⁽¹⁹⁵⁾⁽¹⁹⁶⁾

荒瀬は、啞蟬坊を父にもつ添田知道の自宅に掲げられた「トモ」と読ませる「吐蒙」と墨で書いた門標」の思想にも注目する。「吐蒙は、日本に例のない自己主張の成語」であり「蒙をひらく、なんぞという高みに立っての発言は俺のしごとじゃない、庶民そのものとして蒙（くら）い無知をさらけだすことにわが存在意義がある、という自負」を荒瀬は読み込んだ。⁽¹⁹⁷⁾ そうした読みは、宮武外骨が廢姓外骨を名のった姿勢に「別の姓を名のるのでなく「廢姓」と称した態度は、明治新政府のみせかけの四民平等説で名字を強制される以前の姓なき平民であろうとした積極的な意志の表明であった」と荒瀬が評する部分にも顕著であるが、エピソードから思想の批判性を抽出する彼の方法が体现されている。⁽¹⁹⁸⁾

その方法を荒瀬の言葉でまとめれば、「頓智主義は知的な状況把握、状況処理を最高度につらぬく知性本位の姿勢」ということになる。⁽¹⁹⁹⁾ こうした荒瀬の問題意識をどのようにジャーナリズム史研究に合流して読み解いていくかは、今後の課題であるが、知識人に対する距離感と諷刺・頓智への感度が、硬直した規範論や浅薄な理想主義を断ち切る荒瀬の立ち位置を用意したということを以上の記述から確認しておきたい。

荒瀬はフリーランスのむのたけじや岡村昭彦と比べて企業ジャーナリストが「広い可能性を約束

されている」ことに触れている。⁽²⁰⁰⁾朝日新聞「新聞と戦争」取材班による『新聞と戦争』でも戦前と比べて「国民が主権者となり、軍部は消え、表現の自由は正面から保障」され「格段に有利になったこの条件を生かすことが、同じ轍を踏まぬカギだと思う」と記して「伝えるべきことを、恐れずに伝える。過去に照らして、私たちもそう進みたい」と表明した。⁽²⁰¹⁾荒瀬が述べるごとく「言論人は首相にむかって「オメエの言うことはちっともわかんねえよ」と天下に公言できる位置にある」。⁽²⁰²⁾その意味を歴史の中で考えることができる地点には立っている。本稿が考察できた対象は僅かではあるが、荒瀬豊の残してきたものに立ち返り、それを批判的に潜り抜けたジャーナリズム史研究・メディア史研究が幾分でも生じることを望みたい。

註

- (1)——有山輝雄『占領期メディア史研究—自由と統制・1945年』[柏書房, 1996年] 104頁, 井川充雄「メディア史研究の動向—昭和期」[『メディア史研究』5号, 1996年] 164頁, 山本武利『占領期メディア分析』[法政大学出版局, 1996年] 571頁, 同「「不偏不党」と日本の新聞」[同〔編〕『新聞・雑誌・出版 叢書 現代のメディアとジャーナリズム 第5巻』ミネルヴァ書房, 2005年] 18~19頁。
- (2)——荒瀬の論文に言及しているもの自体は多数あるので、逐一は挙挙できないが、例えば「戦後ジャーナリズム年表」[『新聞学評論』18号, 1969年] では荒瀬の論文は共著論文とあわせて2回, 門奈直樹・井上輝子・林利隆「ジャーナリズム論 八〇年代の議論の方向と広がり」[『新聞学評論』39号, 1990年] では荒瀬への言及は一切ない。『思想の科学』五十年史の会『『思想の科学』ダイジェスト 1946~1996』[思想の科学社, 2009年] でも「死んだはずだよ正太夫」1本の言及があるだけである。
- (3)——林香里『マスメディアの周縁, ジャーナリズムの核心』[新曜社, 2002年] 15頁。
- (4)——佐々木隆『メディアと権力 日本の近代14』[中央公論新社, 1999年], 有山輝雄「メディア史を学ぶということ」[有山輝雄・竹山昭子〔編〕『メディア史を学ぶ人のために』世界思想社, 2004年]。
- (5)——この時期の問題意識の表出として吉沢南「ジャーナリズムと歴史研究のあいだ—本多勝一氏のジャーナリズム活動を中心に」[『歴史学研究』427号, 1975年12月] も参照のこと。
- (6)——例えば『マスコミの明日を問う』全4巻[大月書店, 1985年], 『21世紀のマスコミ』全5巻[大月書店, 1997年]。
- (7)——別府三奈子『ジャーナリズムの起源』[世界思

想社, 2006年] 27頁。

(8)——佐々木, 前掲『メディアと権力』11頁。

(9)——有山, 前掲『占領期メディア史研究』, 同『戦後史のなかの憲法とジャーナリズム』[柏書房, 1998年], 山本, 前掲『占領期メディア分析』, 佐藤卓己〔編〕『戦後世論のメディア社会学』[柏書房, 2003年], 同『八月十五日の神話—終戦記念日のメディア学』[ちくま新書, 2005年], 同『テレビの教養—億総博知化への系譜』[NTT出版, 2008年], 同『輿論と世論—日本的民意の系譜学』[新潮選書, 2008年], 小林聡明『在日朝鮮人のメディア空間 GHQ占領期における新聞発行とそのダイナミズム』[風響社, 2007年], 井川充雄『戦後新興紙とGHQ—新聞用紙をめぐる攻防』[世界思想社, 2008年]。

(10)——先行研究に関しては, 井川, 前掲「メディア史研究の動向」, 吉田則昭「戦後メディア史研究の同時代的考察」[『同時代史研究』2号, 2009年] を参照。

(11)——『年報・日本現代史』にも創刊号から14号[1995~2009年] までは戦後日本のジャーナリズムを対象とした論文はない。その他には, 福岡愛子「日本にとっての「文革」体験—『朝日新聞』『産経新聞』の報道比較を通して見る日本への影響」[『戦後日本スタディーズ』2巻, 紀伊國屋書店, 2009年], 大島香織「被爆地からみた「六〇年安保」—原水爆禁止運動と自民党の世論対策」[『年報・日本現代史』15号, 2010年], 瀬畑源「昭和天皇「戦後巡幸」における天皇報道の論理—地方新聞の報道を手がかりとして」[『同時代史研究』3号, 2010年] などがある。なお近代の時代を扱った『岩波講座・日本通史』18巻[岩波書店, 1994年] には山本武利「マスメディア論」がある。

(12)——安田常雄「現代史と同時代史のあいだ—方法的イメージの試み」[『同時代史研究』1号, 2008年] も参

照のこと。

(13)——朝日新聞「新聞と戦争」取材班『新聞と戦争』[朝日新聞出版, 2008年], 河合史夫『記者風伝』[朝日新聞出版, 2009年], 朝日新聞「検証・昭和報道」取材班『新聞と「昭和」』[朝日新聞出版, 2010年]。

(14)——別府, 前掲『ジャーナリズムの起源』24頁。

(15)——清水幾太郎『ジャーナリズム』[岩波新書, 1949年] 157頁。

(16)——山本, 前掲「「不偏不党」と日本の新聞」5頁。

(17)——別府, 前掲『ジャーナリズムの起源』19～20頁。

(18)——荒瀬豊「言論の自由」[清水幾太郎〔編〕『マス・コミュニケーション総論 講座 現代マス・コミュニケーション 1』河出書房新社, 1961年] 16頁。

(19)——荒瀬豊「マス・コミと天皇制」[『ジュリスト』1973年9月1日号] 63頁。

(20)——なお荒瀬豊氏から, かつて氏が『ばれるが』(評論社)に連載した「ジャーナリズム私見」42回分[『ばれるが』1974年2月号～1978年3月号]の寄贈を受けた。記して謝意を表したい。

(21)——筆者が目にした限りでは, まとまった形で荒瀬の自伝的情報にあたる唯一の文献である。従って本章の記述で特に注記のないものはこの文献の内容による。

(22)——荒瀬豊氏には2008年11月6日と2010年3月11日に聞き書きを行った。聞き書きの内容に触れる場合, 本文に表記する形で前者は(荒瀬談1)とし, 後者は(荒瀬談2)とし, 双方からの言及は(荒瀬談1・2)とする。なお1回目の聞き書きは安田常雄国立歴史民俗博物館教授に同行いただいた。

(23)——『[現代日本] 朝日人物事典』[朝日新聞社, 1990年] 84頁。「荒瀬豊」の項目は山本明が執筆。

(24)——荒瀬豊「現実と学問をつなぐもの—私のこしかた, ゆくすえ」[『思想の科学』1955年4月号] 85頁。

(25)——荒瀬豊「弱者の苦悩と抵抗 「眼には眼を」におけるカイヤットの発想」[『映画芸術』1958年5月号] 26頁。

(26)——荒瀬, 前掲「現実と学問をつなぐもの」86頁。

(27)——同上。

(28)——同上, 87頁。

(29)——後に荒瀬は『世界』などの総合雑誌に多くの政治外交論を発表するようになる。1975年の時点で荒瀬は「『朝日』の国際・外交記事を私はかなり注意して読んでいるつもり」と書いていることから彼の関心の持続が窺われる[『ばれるが』1975年10月号24頁]。

(30)——荒瀬, 前掲「現実と学問をつなぐもの」87頁。

(31)——東京帝国大学文学部に新聞研究室が設置されたのは1929年である。同研究室を土台として東京大学新聞研究所が設立したのは1949年である。その後, 1992年に東京大学社会情報研究所に改組され, 同研究所は, 2000年に創設された東京大学大学院情報学環に2004年統合された。詳しくは「新聞研究所・社会情報研究所年表 昭和24年—平成11年(1949—1999)」[『東京大学社会情報研究所紀要』58号, 1999年]を参照のこと。付言すれば, 東京大学社会情報研究所に改組された1992年前後には他にも関連する重要な変化があった。1951年にできた日本新聞学会が1991年に日本マス・コミュニケーション学会に改称し, 1992年に前述した通りメディア史研究会が創設されたことである。

(32)——荒瀬, 前掲「現実と学問をつなぐもの」87～88頁。

(33)——荒瀬豊「自由の歴史を鳥瞰 戦前総合雑誌抵抗のあとを記録」[『日本読書新聞』1966年9月5日号]。

(34)——荒瀬, 前掲「現実と学問をつなぐもの」88頁。

(35)——同上。

(36)——同上, 89頁。

(37)——同上。

(38)——同上, 88頁。

(39)——例えば『毎日新聞』1956年8月3日付の総合雑誌紹介や, 『読売新聞』1956年8月23日付夕刊の中村哲「論壇時評」が荒瀬の論文に言及している。

(40)——荒瀬が東大紛争の折どのような状況にあったのかはわからないが, 日高六郎は東京大学新聞研究所を1969年5月に辞職する。竹内郁郎は「日高先生ご自身にしてみれば, 信条的に一貫しているのですが, 残されたものにとっては何か裏切られた気持ちにもなりますよね」と語っている[杉山光信・吉見俊哉〔聞き手〕「竹内郁郎先生に聞く」『東京大学社会情報研究所紀要』58号, 1999年, 24～25頁]。その中で, 大学院の進学者数にはそう変動は見られないとはいえ, 新聞研究所の教育部研究生自治会の無期限ストライキの影響で1969年と1970年は研究生の募集停止に及び, 東大紛争後には研究生の志願者数と入所者数ともに減少を見せた[東京大学百年史編集委員会〔編〕『東京大学百年史 部局史四』東京大学, 1987年, 506, 524, 532頁]。時代の変化を抜きには考えられないにせよ, 新聞研究所への学生の「憧れ」というものが一定分散した様子は窺える。

(41)——『ばれるが』1977年9月号17～19頁(実際の頁表記は逆順, 以後も同様)。荒瀬は評論社から発行されていた『ばれるが』で「ジャーナリズム私見」という

新聞時評を行うことになる。前任者として『ばれるが』で新聞時評をしていたのは、かつて『北海道新聞』の論説委員として七社共同宣言批判などで知られた須田禎一である（その時評は須田禎一『新聞月評1972』評論社、1973年を参照のこと）。須田が亡くなってしまい、荒瀬が『ばれるが』の新聞時評を受け継ぐことになった（荒瀬談2）。荒瀬の須田論には、荒瀬豊「ジャーナリストとしての須田禎一」[『須田禎一・人と思想 月刊たいまつ（臨時増刊号）』たいまつ社、1974年]がある。須田の伝記は小笠原信之『ペンの自由を貫いて—伝説の記者・須田禎一』[緑風出版、2009年]を参照のこと。

(42)——『思想の科学』の編集後記によれば、同誌1960年7月号から1961年6月号まで荒瀬は編集委員の一人を務めている。

(43)——荒瀬豊「抵抗と死をめぐる—「良識」三氏への公開質問状」[『現代の眼』1972年10月号] 255頁。

(44)——荒瀬、前掲「現実と学問をつなぐもの」86頁。

(45)——同上、90頁には24歳と記載されている。これは原稿提出日の年齢であろう。雑誌が出版された時点では誕生日を迎えて25歳であったと思われる。

(46)——同上、85頁。

(47)——荒瀬豊・木原啓吉「新聞は理解されているか—高校生を対象とした理解度調査」[『新聞研究』17号、1951年] 30頁。

(48)——荒瀬豊「おけさ哲学」[『思想の科学』1954年11月号] 83頁。

(49)——同上、84頁。

(50)——同上、85～86頁。

(51)——同上、86～87頁。

(52)——同上、87頁。

(53)——ただし少なくとも1955年の時点で荒瀬はすでに添田啞蟬坊に言及している[『荒瀬豊「日本における世論の発展」蠟山政道ほか『世論に関する考え方』新日本教育協会、1955年、49～50頁]。

(54)——香内三郎「日本ジャーナリズムの構造転換—メディア理論と〈物語〉の貧困化」[『窓』21号、1994年] 171頁。

(55)——同上172頁。この歴史的経緯に関しては、山本明の「ブルジョア・デモクラシーの原理としての政治的自由は権力打倒の自由を本質とするのであるから、I・言論の自由は支配権力にたいする批判の自由を原理とし、支配権力も批判者の自由を保証することを理念とする。このことから、II・言論の自由の行使者は、対立的言論を積極的に保証するという立場をとらなければならない。

／ところが、言論の自由が政治的自由の一環であるということを軽視すると、言論の自由の形式の面だけが強調され、その内容が忘れられてしまう」という言及も押さえておく必要がある[山本明『現代ジャーナリズム』雄渾社、1967年、107頁]。

(56)——林、前掲『マスメディアの周縁、ジャーナリズムの核心』177頁。

(57)——メディア、マス・メディア／マス・コミュニケーションといった語彙に関しても簡単に言及しておく。メディアは多義的な意味をもつが、「コミュニケーションの媒介機能こそメディアの最も基本的意味」[有山、前掲「メディア史を学ぶということ」7頁]であり、「出来事に意味を付与し体験を知識に変換する記号の伝達媒体」[佐藤卓己『現代メディア史』岩波書店、1998年、3頁]であるという指摘を確認しておくに留める。マス・メディアとマス・コミュニケーションは一般的にほぼ同義に使用されており、両者の概念の違いを論じた研究は少ないようである。マス・メディアは媒体の側面、マス・コミュニケーションは大量の情報伝達の側面に力点がかかけられていると思われる。

(58)——香内三郎「マス・コミュニケーションの歴史」[鶴見俊輔・粉川哲夫〔編〕『コミュニケーション事典』平凡社、1988年] 497頁。

(59)——稲葉三千男「マス・コミュニケーション」[同上] 495頁。

(60)——この講座の位置づけに関しては辻村明「マス・コミュニケーションとジャーナリズム」[福武直〔編〕『日本社会学の課題 林恵海教授還暦記念論文集』有斐閣、1956年]も参照のこと。

(61)——和田洋一「ジャーナリズムとその日その日主義」[『評論・社会科学』3号、1971年] 4～5頁。ジャーナリズムという言葉が定着し始める同時期の1931年に「論壇時評」の連載が開始されるのも興味深い。詳しくは田中紀行「論壇ジャーナリズムの成立」[『知識人 近代日本文化論4』岩波書店、1999年]、大澤聡「『論壇時評』の誕生——一九三〇年代日本のジャーナリズム空間」[『出版研究』39号、2009年]を参照。

(62)——有山輝雄「日本のジャーナリズム論の再検討」[『新聞学評論』35号、1986年] 216頁。

(63)——佐藤、前掲『現代メディア史』12頁でも「マルクス主義ジャーナリズム論の多くは空疎なプロレタリア文化万歳を高唱して終わるものであったが」、戸坂潤の「新聞現象の分析」等は「例外的に戦前の議論の最高水準に到達していた」と評している。

- (64)——『戸坂潤全集 第五巻』〔勁草書房, 1967年〕495頁。
- (65)——『戸坂潤全集 第三巻』〔勁草書房, 1966年〕121頁。
- (66)——『戸坂潤全集 第四巻』〔勁草書房, 1966年〕149～150頁。
- (67)——前掲『戸坂潤全集 第三巻』150頁。傍点は原文。
- (68)——和田, 前掲「ジャーナリズムとその日その日主義」9, 14頁。
- (69)——清水, 前掲『ジャーナリズム』28頁。
- (70)——鶴見俊輔「解説 ジャーナリズムの思想」〔『ジャーナリズムの思想 現代日本思想大系 12』筑摩書房, 1965年〕8, 41頁。
- (71)——代表的な日本のジャーナリズム論への言及は、後述の荒瀬の定義も含めて、林利隆『戦後ジャーナリズムの思想と行動』〔日本評論社, 2006年〕30～31, 50, 247～249頁でもなされている。その他、参照すべき先行研究として早川善治郎「マス・コミュニケーション論とジャーナリズム論」〔『新聞学評論』18号, 1969年〕がある。
- (72)——林, 前掲『マスメディアの周縁, ジャーナリズムの核心』382頁。今回は検討できなかったが、本稿の脱稿後に林香里『〈オンナ・コドモ〉のジャーナリズム—ケアの倫理とともに』〔岩波書店, 2011年〕が刊行されたことを付記しておく。
- (73)——同上『マスメディアの周縁, ジャーナリズムの核心』382, 387頁。
- (74)——同上, 383頁。荒瀬自身も「マス・コミュニケーションの現状にたいする自由の復権は、企業性のなかにおいてではなく、企業性と別の次元に立つものを基軸として考えられねばならないだろう。まず第一には、企業の被雇用者としての位置を強いられている個々のジャーナリストの自由な発言。そして第二には、マス・コミュニケーションの受け手の自発性」であると述べている〔荒瀬, 前掲「言論の自由」27頁〕。後者に関しては「読者が執筆者となるのが新聞のあるべき姿」と考える『土曜日』を対象とした荒瀬の考察を参照のこと〔同「読者の弁証法『土曜日』における実験と実践」鶴見俊輔・山本明〔編〕『抵抗と持続』世界思想社, 1979年, 136頁〕。「受け手の自発性」に関してはかなり初期の段階から「下からの言論の組織化へあらゆる場所で討論の渦を巻起そう」〔『日本読書新聞』1954年5月3日号〕でその重要性を論じており、こういう部分にも荒瀬の一貫性が垣間見られよう。
- (75)——同上『マスメディアの周縁, ジャーナリズムの核心』126頁。
- (76)——同上, 277頁。
- (77)——同上, 274頁。
- (78)——荒瀬豊「ジャーナリズム」〔前掲『コミュニケーション事典』〕258頁。
- (79)——荒瀬豊「ジャーナリズム論のために」〔『新聞学評論』34号, 1985年〕2頁。なお同論文名は目次では「現代ジャーナリズム論のために」と記載されている。
- (80)——別府, 前掲『ジャーナリズムの起源』14頁。
- (81)——この点は何ヵ所かで戸坂潤は退けるような考えを表明している。例えば「ジャーナリズムは一つのイズム・主義だと云ったような、妙な錯覚か愚にもつかぬ洒落」といった文章に認められる〔前掲『戸坂潤全集 第四巻』149頁〕。
- (82)——荒瀬豊「ジャーナリスト」〔城戸又一・日高六郎〔編〕『ジャーナリズム 講座 現代・マスコミュニケーション 3』河出書房新社, 1960年〕87～88頁。ゆえに論者自身の価値観が問題となり、ジャーナリズム論を掘り下げるためには思想史研究が不可欠なのである。大石裕は、この荒瀬の位置づけを「ジャーナリズム論の有力かつ重要な視点」としながらも「かなり規範的な観点に立った説明」とも評している〔大石裕『ジャーナリズムとメディア言説』勁草書房, 2005年, 36, 77～78頁〕。規範に関する論点は「おわりに」で後述する。
- (83)——林, 前掲『マスメディアの周縁, ジャーナリズムの核心』386頁。
- (84)——荒瀬, 前掲「抵抗と死をめぐる」255～256頁。
- (85)——荒瀬豊「職業について」〔『図書館雑誌』1973年7月号〕25頁。
- (86)——『ばれるが』1974年2月号28頁。
- (87)——荒瀬豊「占領統治とジャーナリズム」〔東京大学社会科学研究所〔編〕『戦後改革 3 政治過程』東京大学出版会, 1974年〕376頁。
- (88)——同上, 351頁。
- (89)——荒瀬, 前掲「ジャーナリスト」96頁。
- (90)——荒瀬, 前掲「抵抗と死をめぐる」256～257頁。
- (91)——例えば和田洋一「ドイツ新聞学の受容をめぐる」〔『人文学』109号, 1968年〕。
- (92)——荒瀬, 前掲「ジャーナリズム論のために」6～7頁。この文では「情況」を使っているが、全般的に荒瀬は「状況」の方を多く用いている。荒瀬豊「戸坂潤と現代日本—『日本イデオロギー論』をめぐる」〔『世界』1968年11月号〕での「どんな短文にも状況との格闘の

なかに長期の展望を練りあげた彼の作品」(228頁)や「状況のなかでもっとも必要なテーマに全力投球をつづけたこと」(231頁)といった記述は、そのまま荒瀬の自己表明としても読める文章である。

(93)——荒瀬豊・稲葉三千男「映画における状況と個人」「死刑台のエレベーター」と「戦争と貞操」の問題」[『映画芸術』1958年10月号]25頁。この引用文は荒瀬の文章である。

(94)——荒瀬豊「投書とジャーナリズム」[『新聞研究』1976年12月号]32頁。

(95)——荒瀬、前掲「ジャーナリスト」88頁。

(96)——荒瀬、前掲「ジャーナリズム論のために」5～6頁。なおリングブルムへの同様の言及はすでに荒瀬豊「組織論のための覚書—二つのレジスタンス映画をとおして」[『世界』1964年5月号]186頁にある。

(97)——荒瀬、前掲「投書とジャーナリズム」32頁。

(98)——荒瀬、前掲「ジャーナリズム」259頁。

(99)——荒瀬豊「新聞と世論」[千葉雄次郎(編)『新聞』有斐閣、1955年]161, 164頁。

(100)——荒瀬豊・岡安茂祐「核アレルギー」と「安保公害」—シンボル操作・一九六八年」[『世界』1968年9月号]81, 84頁。ただしこれは共著論文である。

(101)——『ばれるが』1976年1月号19頁。

(102)——『ばれるが』1975年1月号21頁。

(103)——荒瀬豊「新聞処分」の現況—毎日倒産劇の後にくるもの」[『現代の眼』1977年9月号]283頁。

(104)——荒瀬豊「解説 マックレイカーの弾性」[『宮武外骨著作集 第二巻』河出書房新社、1987年]673頁。

(105)——『ばれるが』1976年4月号17頁。

(106)——『ばれるが』1974年2月号30頁。

(107)——同上、29頁。

(108)——『ばれるが』1974年4月号24頁。杉山光信「新聞研究所と1950年代のマスコミ研究」[『東京大学社会情報研究所紀要』58号、1999年]90頁では「荒瀬のばあいもどちらかといえば明治初期の意見新聞への郷愁があり、新聞論説の指導性を期待するところがある。それも1950年代の大衆運動の位置づけとコミットからすれば理解できないことではない」と記している。

(109)——有山、前掲「メディア史を学ぶということ」4頁。

(110)——林、前掲『マスメディアの周縁、ジャーナリズムの核心』385頁。

(111)——内川芳美・稲葉三千男(編)『マスコミ用語辞典』[東洋経済新報社、1982年]103頁でも「マス・コミュニ

ケーションとの関係でいえばジャーナリズムはその下位概念であるが、しかしたんなる一部以上の独自の領域を形成している活動といえる」と記載している。

(112)——荒瀬、前掲「ジャーナリズム論のために」8～9頁。

(113)——同上、9頁。

(114)——荒瀬は「ジャーナリストの第一要件は個人的な表現をつくすことにある」と書いている[荒瀬、前掲「解説 マックレイカーの弾性」673頁]。

(115)——荒瀬豊「マスコミと家族の問題」[『法学セミナー増刊』1979年10月号]94頁。

(116)——荒瀬、前掲「ジャーナリズム論のために」5頁。

(117)——『ばれるが』1975年2月号17頁。

(118)——『ばれるが』1976年1月号31頁。

(119)——『ばれるが』1976年10月号18～20頁。

(120)——『ばれるが』1975年4月号18頁。

(121)——『ばれるが』1976年11月号29頁。

(122)——荒瀬、前掲「ジャーナリスト」105～106頁。

(123)——添田知道・荒瀬豊「七〇年代歌謡曲人生誌」[『現代の眼』1974年3月号]134, 136頁。

(124)——佐藤卓己『歴史学 ヒューマニティーズ』[岩波書店、2009年]101～102頁。

(125)——佐藤卓己『メディア社会—現代を読み解く視点』[岩波新書、2006年]6, 140頁。佐藤が触れた5つの機能に関しては、大石、前掲『ジャーナリズムとメディア言説』24頁も参照。

(126)——同上『メディア社会』4頁。

(127)——佐藤、前掲『歴史学』31頁。

(128)——同上、102頁。

(129)——同上、69頁。

(130)——林、前掲『マスメディアの周縁、ジャーナリズムの核心』383頁。

(131)——同上、80頁。

(132)——同上、114頁。

(133)——荒瀬豊「新聞独占の形成過程」[『思想』1955年2月号]29～30頁。

(134)——同上、30頁。言論の責任に対する考察は、新聞に掲載される物語マンガ(諷刺マンガではなく)が政治忌避に棹差すことに一役買っていると分析した荒瀬豊「物語マンガと現代新聞」[『新聞学評論』5号、1956年]にもよく示されている。

(135)——有山輝雄「民衆」の時代から「大衆」の時代へ—明治末期から大正期のメディア」[前掲『メディア史を学ぶ人のために』]116頁。他に、山本、前掲「不

偏不党」と日本の新聞」も参照のこと。

(136)——白虹事件に関しては有山輝雄『近代日本ジャーナリズムの構造 大阪朝日新聞白虹事件前後』〔東京出版、1995年〕に詳しい。

(137)——荒瀬、前掲「新聞独占の形成過程」39～42頁。

(138)——荒瀬豊「新聞営業人」〔城戸又一〔編〕『新聞・雑誌・出版 マス・コミュニケーション講座 第3巻』河出書房、1954年〕158頁。同様の記述は、同、前掲「新聞と世論」173頁、同「村山龍平」〔日高六郎〔編〕『マスメディアの先駆者 20世紀を動かした人々 15』講談社、1963年〕216頁、同、前掲「マス・コミと天皇制」59頁にもある。

(139)——『ばれるが』1975年2月号18頁。

(140)——荒瀬豊「民衆と責任の問題」〔『岩波講座 現代11』岩波書店、1964年〕235頁。

(141)——荒瀬豊「新聞人の責任とは何か 朝日新聞社事件をめぐる問題点」〔『週刊読書人』1964年2月17日号〕。

(142)——荒瀬豊「放送制作者の社会的責任」〔『新聞学評論』14号、1964年〕136～137頁。

(143)——前掲『新聞と戦争』243頁。

(144)——ただし『新聞と戦争』と名詞を並列に掲げた書名は、『新聞の責任』でも『朝日新聞の戦争責任／戦争報道』でもなかったことは考慮に値しよう。さらに本文576頁にも及ぶ本書において白虹事件がわずか2ヵ所しか言及されず（207、434頁）、巻末の関連略年表も1923年からの記載で白虹事件の表記は見られず、戦前のジャーナリズムにおける岐路に対する認識の脆さが露呈している。またむのたけじが戦中のジャカルタ支局での日本軍「慰安婦」への取材の記憶を詳細に書いているのに比べ〔むのたけじ〔聞き手黒岩比佐子〕『戦争絶滅へ、人間復活へ—九三歳・ジャーナリストの発言』岩波新書、2008年、35～39頁〕、むの本よりはるかに分厚い『新聞と戦争』では、たった396頁の「慰安所」に関する記述しかない問題は指摘しておかなければならない。

(145)——荒瀬豊「果して言論は自由であるか——研究者のノートから」〔『世界』1960年8月号〕216頁。

(146)——この点に関しては根津朝彦「戦後8月15日付社説における加害責任の論説分析」上・下〔『季刊戦争責任研究』2008年春季号・同年夏季号〕も参照のこと。

(147)——荒瀬豊「国際問題と日本のマス・メディア—三大紙の社説に見る世界像」〔『別冊法律時報』1号、1957年2月〕175、194頁。

(148)——荒瀬、前掲「組織論のための覚書」183頁。

(149)——「知識人の戦争責任論」とは別に、ジャーナ

リズム／ジャーナリスト自体の戦争責任を問題にしたものとして大熊信行の論考に触発を受けた丸山邦男「ジャーナリストと戦争責任」〔『中央公論』1957年2月号〕に並び、荒瀬の「国際問題と日本のマス・メディア」は後述の「日本軍国主義とマス・メディア」とともに最も早い論文の一つに数えられるものであろう。

(150)——荒瀬豊「日本の進歩主義 前進するその足どりを通して」〔『図書新聞』1956年6月30日号〕や同「論壇回顧」〔『図書新聞』1956年12月22日号〕でも戦争責任論について言及している。

(151)——荒瀬、前掲「現実と学問をつなぐもの」87頁。

(152)——荒瀬、前掲「新聞形成の独占過程」41頁。

(153)——荒瀬豊「日本軍国主義とマス・メディア」〔『思想』1957年9月号〕38～39頁。

(154)——同上、47頁。

(155)——この記事は、荒瀬豊「“亜細亜”は生きている—言論人のアジア観」〔『中央公論』1958年6月号〕や同「外交を国民の手に」〔『世界』1959年6月号〕207頁でも言及されている。

(156)——荒瀬、前掲「国際問題と日本のマス・メディア」193～194頁。

(157)——荒瀬、前掲「“亜細亜”は生きている」237頁。同「チチュバは消えた—「サレムの魔女」をみて」〔『世界』1958年12月号〕188頁でも被支配者であった朝鮮人や台湾人に対する日本人への自己批判の重要性を記している。

(158)——同上「“亜細亜”は生きている」240～241頁。沖縄に関する言及は、荒瀬豊「ヤボネシア、沖縄そして日本」〔『現代の眼』1972年7月号〕も参照のこと。

(159)——この雑誌に関して荒瀬は「「近事」を「評論」というさりげない題号は、どんな事をでも論じ尽くすぞという意味を語るものでさえあった」ともいっている〔荒瀬豊「共同社と『近事評論』」同・高木教典・春原昭彦〔編〕『自由・歴史・メディア 内川芳美教授還暦記念論集』日本評論社、1988年、118頁〕。

(160)——荒瀬豊「日本ジャーナリズムにおける国際政治観の展開—対等外交論の形成」〔『東京大学新聞研究所紀要』14号、1966年〕59、78頁。

(161)——荒瀬豊「日本外交の自立をもとめて」〔『世界』1972年10月号〕166頁。

(162)——荒瀬、前掲「“亜細亜”は生きている」238～239頁。荒瀬豊「政治小説「琉球処分」の栄光 新しい歴史観への序章としての意義」〔『週刊読書人』1968年3月18日号〕でも『ビルマの竖琴』を「自己の血縁の延

長で民族をとらえ、その遺骨を拾い歩くという思想は、血縁エゴイズムであって近代ヒューマニズムとはまったく別のものである」と評している。福岡良明『「反戦」のメディア史—戦後日本における世論と輿論の拮抗』[世界思想社、2006年]も参照のこと。

(163)——同上「“亜細亜”は生きている」240頁。

(164)——荒瀬、前掲「占領統治とジャーナリズム」365頁。

(165)——同上、351頁。

(166)——荒瀬豊「日本国民にみる冷戦意識」[『世界』1963年11月号]94頁。

(167)——荒瀬、前掲「チチュバは消えた」189～190頁。

(168)——森恭三『記者遍路』[朝日選書、1974年]50頁、同『私の朝日新聞社史』[田畑書店、1981年]24頁。

(169)——荒瀬、前掲「抵抗と死をめぐる」252、257頁。

(170)——荒瀬、前掲「ジャーナリスト」109頁。

(171)——ここで詳述する余裕はないが、荒瀬、前掲「果して言論は自由であるか」、同「6・15と七社共同宣言」[日高六郎〔編〕『1960年5月19日』岩波新書、1960年]といった七社共同宣言への批判にも本節で検討するような彼の方法が随所で確認できる。

(172)——荒瀬豊「戦後思想とその展開」[『近代日本思想史講座Ⅰ』[筑摩書房、1959年]346～347頁。

(173)——荒瀬、前掲「占領統治とジャーナリズム」352、354頁。

(174)——荒瀬豊「戦後状況への思想的対応」[古田光ほか〔編〕『近代日本社会思想史Ⅱ』有斐閣、1971年]370頁。

(175)——荒瀬、前掲「占領統治とジャーナリズム」356頁。

(176)——同上、358頁。

(177)——同上、358～361頁。付言すれば、「思われる」という表現を多出させる日本の新聞社説を「主体不在の表現」とし「八・一五につづく日本ジャーナリズムの欺瞞の本質」につながっていると荒瀬が批判したのは渡辺清『砕かれた神』の書評においてであった。「一貫性ある言論の放棄」という日本のジャーナリズム史を考究した荒瀬だからこそ渡辺清になぜ書名を『砕かれた神』ではなく『神を砕いた』にしなかったのかとその論理を問うたのである[『現代の眼』1977年11月号281頁]。

(178)——同上「占領統治とジャーナリズム」374～375頁。

(179)——荒瀬豊「秘密外交か民意外交か」[『世界』1968年3月号]66頁。

(180)——その他、「大事な問題をわきにおいて」小暴力

追放や小さな親切といった「わかり切ったことを説く」ということは、言論の仕事でなく、教化の仕事である」というように事の軽重の転倒を批判したり[荒瀬豊「思想統制の今日の問題状況 主としてマス・コミの動向を中心に」[『教育評論』1964年1月号51頁]、『期待される人間像』の批判にあたっても序論に登場する「その」「それ」といった5つの代名詞が何を意味するのか不明として言葉の理解から論難を始めたりする点[同「教育勅語」以前の道徳思想—『期待される人間像』を読む』[『日本』1965年3月号127頁]にも荒瀬の論理への鋭敏さがよく表出している。

(181)——荒瀬、前掲「占領統治とジャーナリズム」351頁。

(182)——『ばれるが』1976年12月号30頁。

(183)——荒瀬の全ての仕事を扱うことはできず、例えば「ハンガリア問題をどう受けとったか—日本の世論」[『世界』1957年4月号]を始めとするいくつかの重要な論文に言及できなかった。

(184)——荒瀬と同じく大衆文化に関心を寄せた世代の近いジャーナリズム史研究者の山本明との比較も一考すべきテーマである。

(185)——荒瀬によれば論理とカテゴリーの重要性は、思想の科学研究会の月例会や久野収らに影響を受けたという(荒瀬談2)。

(186)——荒瀬、前掲「占領統治とジャーナリズム」360頁。その他、同、前掲「組織論のための覚書」189頁。マス・メディアとジャーナリズムを対比した図1でも「組織体」と記されている。荒瀬は「組織」と「組織体」の問題を「思想集団としての民友社」[『東京大学新聞研究所紀要』17号、1968年]で考えようとしたという(荒瀬談2)。

(187)——荒瀬、前掲「戦後思想とその展開」345頁の書き出しの箇所です。「戦後に論議された主題を中心に思想の歴史を再構成する試み」「いわば問題中心の思想史という冒険であります」と述べている。

(188)——荒瀬豊「知性人の責任感—野添憲治さんに」[『思想の科学』1961年11月号]67頁。論争自体に関しては赤澤史朗「『農民兵士論争』再論」[『立命館法学』271・272号上巻、2000年]を参照のこと。

(189)——荒瀬、前掲「戦後状況への思想的対応」344頁。

(190)——荒瀬豊「書評 レイモンド・ウィリアムズ イギリス新左翼の大衆・文化論」[『思想の科学』1961年9月号]69～70頁。

(191)——荒瀬、前掲「戦後状況への思想的対応」335～

336 頁。

(192)——同上, 372 頁。

(193)——『ばれるが』1974 年 9 月号 31 頁。

(194)——『ばれるが』1976 年 10 月号 26~27 頁。同 27 頁の「[少女]むけのお講義」という表現は気になるが、『ばれるが』1976 年 3 月号 29 頁には「男性アナ中心主義という紅白〔歌合戦〕の構造そのものに批判の矢をむけるべきであつたろう」という一文も見られる。

(195)——荒瀬豊「貧民窟の笑いと怒り—添田啞蟬坊」〔『別冊経済評論』11 号, 1972 年〕269~270 頁。

(196)——荒瀬豊「解説 啞蟬坊とその思想」〔添田啞蟬坊『啞蟬坊流生記 添田啞蟬坊・知道著作集 1』刀水書房, 1982 年〕338 頁。

(197)——荒瀬豊「解説 記録としての『空襲下日記』」〔添田知道『空襲下日記 添田啞蟬坊・知道著作集 3』刀水書房, 1984 年〕345 頁。

(198)——荒瀬豊「非転向の平民主義者外骨 「宮武外骨 著作集」の復刻とその再評価」〔『週刊読書人』1972 年 4 月 10 日号〕。

(199)——荒瀬, 前掲「解説 マックレイカーの弾性」676 頁。

(200)——荒瀬豊「“時に殉ずる精神”の挑戦 むのたけじ岡村昭彦氏 対話「1968 年」の意義」〔『週刊読書人』1968 年 5 月 20 日号〕。

(201)——前掲『新聞と戦争』243, 531 頁。この『新聞と戦争』に携わった上丸洋一は回想文「戦時報道の事実を徹頭徹尾追求—連載「新聞と戦争」を振り返って」〔『新聞研究』2008 年 6 月号〕57 頁において「大衆（マス）を基盤とする朝日新聞が、結局のところ、大衆の意思に背をむけて少数意見にくみする勇気を持てなかったことこそが本質的な問題だったのではないか」と記している。

(202)——『ばれるが』1974 年 2 月号 29 頁。

なお本研究は 2010 年度の科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による成果の一部である。

（国立歴史民俗博物館外来研究員, 日本学術振興会特別研究員PD）

（2010 年 9 月 17 日受付, 2010 年 11 月 30 日審査終了）

Study of History of Ideas of ARASE Yutaka : Principle of Criticism of Journalism

NEZU Tomohiko

This article examines the ideas of ARASE Yutaka (born in 1930) from the viewpoint of journalism and the history of journalism. It questions the meaning of studying journalism and its history. This is the first study to examine the formation of the ideas of ARASE Yutaka, who was a researcher on the history of journalism, and his theory and criticism of journalism.

Chapter I, "Formation of Ideas" follows ARASE, who was a college student and a journalist of Asahi Shimbun at the Niigata branch before he spent his life as a researcher at the Institute of Journalism and Communication Studies, University of Tokyo, and how he developed his consciousness of "connecting reality and the academic world" in those days. While analyzing the "Philosophy of Okesa," which discusses folk songs of Niigata, this chapter determines the location of the problem consciousness of ARASE.

Chapter II, "Theory of Journalism" stresses the importance of the fact that ARASE understood journalism not just as a subordinate concept of mass media but studied the tense relationship between them, by referring mainly to the journalism theory by TOSAKA Jun and HAYASHI Kaori. This chapter clarifies that ARASE understood the concept of journalism as an ideological message facing the reality with critical thinking, and delves into the critical role specific to journalism.

Chapter III, "Criticism of Journalism" studies ARASE's criticism of journalism in history. ARASE read the process of separation of "freedom of speech" demanded by journalists from the "movement for liberation" in the Rice Riot, and observed the "abandonment of consistent speech" in connection with the responsibility of journalism at times of war. This chapter reexamines ARASE's analysis of journalistic discourse just after defeat in war to indicate clearly that his method of criticism of journalism is based on a complete logic.

Finally, after addressing some remaining tasks, this article presents the theory that the practical critical thinking of ARASE, who sneaked through popular ideas with a sense of distance from intellectuals and sensibility to sarcasm and wit, was the principle that connected his self-image as an intellectual and the ideas of journalism.

Keywords: History of journalism, Journalism, Tense relationship with mass media, Responsibility of journalism at times of war, Critical character of ideas
